



記入日 2018 年 1 月 1 日

1. 概要

実践団体名	仙台市立郡山中学校		
連絡先	※代表者または担当者の連絡先電話番号 022-248-0071		
プランタイトル	郡山中学校が小学校と地域と協働する防災教育活動プラン		
プランの対象者※1	中学生、小学生、地域住民、保護者・PTA、教職員、防災関係者	対象とする災害種別※2	No7 災害全般

※1 別紙「記入上の留意点」の1. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※2 別紙「記入上の留意点」の2. 項目から1つ選択し、記入してください。

【プランの目的・ここがポイント!】 本実践プランでは、

どんな地域や学校の特性にも応じられる防災教育の実践プランを創造し、幅広い年代層に対して地域の防災力と防災・減災の意識を確実に向上させ、現在及び将来を見据えた地域防災の担い手を育むことを目的に、地域と協働して中学生が主導する防災教育を実践する。さらに、大震災の被災と復興を知り支援し、そこから教訓を学び継承し、奉仕的精神と自助・共助を培い、ともに生き抜く力の糧を学ぶことを目指す。そしてこれらの実践プランの目的を通じて、防災・減災の文化化の推進による地域コミュニティ構築をねらいとする。

【プランの概要】

- 1、津波被災地の視察や交流、津波被災農家に弟子入り体験活動を行い、復旧・復興の現状や被災者の心情とその変容を知り、被災から立ち直って再生・復興に向けて頑張り続ける農家や住民の方々から、貴重な教訓と生き抜く力の糧を学ぶ。そして、震災の記憶と教訓を継承し、どんな困難や苦難にも立ち向かう心を培う。
- 2、中学生が主導する住民参加型の地域防災訓練と防災教育を毎年継続して実施し、地域防災の力とその意識を年々高め、防災・減災の知識とスキル、そして自助と共助の術を習得させ、地域防災を担う人材を育む。
- 3、防災教育活動を通じて中学生が地域貢献活動と地域の絆づくりを推進し、生徒会や部活動、グループ等の単位を含め、全校生徒が小学生や住民と協働する防災教育とその実践に自主的かつ果敢に取り組む。
- 4、学校と地域の共通目標である地域防災力の向上と安全・安心な地域づくりに向けて、この共通目標の達成度を高めるため、学校と地域による連合体組織を設立して防災教育とその実践を連携して推進する。
- 5、実践プランを PDCA マネジメントサイクルにて推進し、自己評価と外部評価によるプランの改良・創生を図る

【期待される効果・ここがおすすめ!】

- 1、津波被災地の視察と農家に弟子入り体験により、被災者の現状と心の変容や復興に向けた取組とその意欲・姿勢を知り、理解することにより、大震災の教訓を受け継ぎ、生徒自らが未来を切り拓き、生き抜く力を学ぶ。
- 2、中学生が主導する地域防災訓練を行うことで、現在と将来の地域防災を担う人材が育成され、自助と共助の術を身に付けた人材が毎年増員され、確実に地域防災力を向上させ、安全・安心な地域づくりに資することができる。
- 3、学校・中学生が地域を巻き込む防災教育を実践展開し、住民と共に防災・減災に関する知識・意欲・態度を培う。
- 4、防災教育を通じて学校と地域が協働し、両者の絆を強め、希薄な人間関係等の地域が抱える課題の解決を図る。
- 5、本プランによる防災教育を通じて、生徒は“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ心と姿勢を変容させ、自他を思いやる自助と共助の心を通い合わせる豊かな人間性を育むことができる。

2. プランの年間活動記録 (2017 年)

	プランの 立案と調整	準備活動	実践活動
4 月	本年度の企画計画を、 全教職員で確認周知	企画計画書の作成と担 当教員の決定	地震を想定し、校舎内から校庭への全校生 徒の避難訓練
5 月	津波被災農家に連携依頼 と実施計画の検討調整	学区内の 3 小学校との防災教 育と防災訓練の検討・協議	日本ユネスコ協会連盟の支援のもと、全校生徒の ESD に関するボランティア体験活動を促進する 「ユネスコ協会 ESD パスポート」事業を開始
6 月	学校支援組織と防災教育 の企画・計画の検討・協議	津波被災地の下見と震災遺構 事務所との事前打合せ	全校生徒が個々に様々なボランティア活動に取 り組み、ESD パスポートを活用 (H30.1 月まで)
7 月	学校評価委員会の立案	防災シンポジウムの講師依頼	地震想定して中学生が地区ごとに集団下校訓練
8 月	○津波被災農家に弟子入 り体験の計画の確認・協議 ○気象台や消防署に、防災 教育と訓練の連携依頼	○9 月津波被災農家弟子入り 体験の現地見と計画の確認 ○11 月開催の防災シンポジウ ムの講師(岩手大学)と検討	○科学部が小学生に科学実験講座、家庭部が幼児 に物作り教室、吹奏楽部が夏祭にて演奏披露 ○小・中学生と住民が合同で地域清掃活動 ○小・中学校の全教員が防災教育等の合同研修会
9 月	○11 月地域防災訓練を 学校支援組織と計画・準備 の協議・検討	○11 月地域防災訓練で生協 とホームセンターとの搬入物 資の数量等の支援準備を確認	○津波被災農家の方々による講演会 ○1 年生が津波被災地と震災遺構を視察し、被災 農家に弟子入り体験
10 月	○生徒会がユネスコ・スク ール東北大会での防災学 習成果の発表準備	○中学校と地域組織や行政等 が避難所運営マニュアルと 11 月地域防災訓練を検討・協議	○小学校と市民センターが開催する地域防災訓 練を本校生徒 75 人が避難所開設や炊き出し支援 ○防災教育チャレンジプランにて中間報告
11 月	○全国政令都市大会で、防 災教育の発表内容等の検 討・調整 ○地域防災訓練で支援を いただく組織・団体・企業 等との連携調整	○地域防災訓練の使用物品等 と準備状況の確認、支援をい ただく大学、企業、気象台、 消防署、支援組織等と打合せ ○ユネスコスクール東北大会 での防災教育の発表準備	○シェイクアウト訓練と緊急地震速報の集会 ○生徒が主導する地域防災訓練 ○ユネスコスクール東北大会で生徒会が防災学 習成果発表・2 年生のークラスが合唱 2 曲披露 ○ボランティア・スピリット・アワードの北海 道・東北ブロック大会にて生徒会が成果発表
12 月	○早稲田大学との共同研 究(防災教育といじめ抑止 教育の融合)実践等の調整	○防災教育チャレンジプラン 最終報告会の準備と発表内容 等の検討・協議	○ユネスコスクール全国大会にて、防災教育で ESD 大賞にて特別賞を受賞 ○早稲田大学との共同研究について検討会開催
1 月	○防災教育に関する調査 データの準備・分析作業	○本年度の防災教育の成果・ 効果・課題等の評価分析活動	○2 年生が津波被災地と震災遺構を視察し、その 後に復興ミュージカルを視聴
2 月	○次年度の防災教育の実 施企画・計画立案	○教育助成財団等への報告書 等の作成	○防災教育チャレンジプランにて最終報告 ○防災教育の評価の実施と結果の外部公表
3 月	○実践プランの改良・創出	○次年度の計画・企画検討	○全校生徒による故郷プロジェクトの開催

3. 実践したプランの内容と成果

【実践プログラム番号： NO. 0】※3

タイトル	平成29年度 防災教育の実践概要
実施月日（曜日）	平成29年度：平成29年4月～平成30年3月
実施場所	実践：本校と学区内地域と3つの小学校、市民センター 津波被災地(仙台市若林区) 発表：ユネスコスクール東北大会(宮城教育大学)、 ユネスコスクール全国大会(福岡県大牟田市) ボランティア・スピリット・アワード(ブロック大会：仙台市) 全国政令指定都市中学校長会(仙台市) ちゅうでん教育大賞(名古屋市)
担当者または講師	担当者・講師等の区分：講師 氏 名：渡邊静男・他2名 森本晋也 丸山 淳 所属・役職等：(株) 荒浜アグリパートナーズ、岩手大学准教授、市教委
所要時間または「コマ数×単位時間」	【実践プログラムごとに記載】
プログラムのカテゴリ、形式※4	16(避難・防災訓練)、13(体験学習)、9(校外学習・移動教室)、 7(学校内クラブ活動)、4(総合的な学習の時間)、 3(講演会・シンポジウム)、12(研究)
活動目的※5	2(防災に役立つ資料・材料づくり)、3(災害に強い地域をつくる)、 4(災害を想定した訓練)、6(防災に関する知識を深める)、7(技術を身につける)、8(防災意識を高める)、9(災害対応能力の育成)
達成目標	<p>本校は、仙台の副都心再開発により大規模商業施設が開店したり、高層マンションが建設中であつたり、地域の生活環境が激変しつつある。東日本大震災の教訓から、地域の人々の命を守り、助けるためには、自助と共助が、いかに大切かを、全ての住民が痛感している。しかし、大規模都市開発や地域の核家族化・高齢化、そして新たな住民との関わりなど、地域課題が表出している。支え合い、助け合い、共に地域で生活する人々が、共助で示された絆の大切さを持ち続けることが、昨今、なおさら懸念される危機的状況に向かいつつある。このため、図示しているように、学校とその中学生が地域住民を巻き込む防災教育学習を創意・工夫して行うことで、意図的・計画的に地域の関わりとつながりを継続・拡充する教育実践展開を行っている。さらには、安全安心な地域づくりと地域防災力の向上は、学校と地域の共通する目標であることから、その目標の達成度を高めることから、学校と地域が協働する防災教育に取り組むことが必要かつ重要と考える。</p> <p>このような実践展開からは、中学生が防災・減災の知識・スキル、</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>中学生が主導する住民参加型・防災教育のねらい</p> <p>副都心再開発と核家族化が進み、中学生と住民の絆が懸念される地域において、地域防災力を高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○災害時の自助・共助の方法を学ぶ ○防災意識と災害対策・対応力を高める ○防災・減災行動と防災対応能力を身に付ける </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>中学生が核となる防災教育活動に取り組み 地域住民を巻き込む活動に発展させ、 小・中学校と住民の協働体制に進化を図る</p> </div> <div style="text-align: center; margin: 10px 0;">↓</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>地域の人々との「関わり」・「つながり」を継続・拡充し、 防災・減災に強い、安全・安心で、持続可能な 強靱な地域社会づくりと、その担い手の育成を推進</p> </div>



	<p>行動を習得し、毎年卒業して地域を支えることになり、地域防災を担う人材が毎年確実に増員され、安全・安心で持続発展可能な、強靱な地域社会づくりに資する教育実践が可能になると考える。</p>
<p>実践方法・進め方 (箇条書き またはフロー)</p>	<p>平成29年度の防災教育の計画概要は、 ①震災と教訓を学ぶ、②復興を知る、支援することを実践のねらいとして、9月上旬に1年生が仙台市沿岸部の津波被災地を視察し、復興支援や交流を行い、その報告を11月の防災教育シンポジウムに生徒や保護者、地域住民に行っている。昨年度、2年生は県南部の沿岸部を視察し、津波被災した中学校と交流している。今年度の2年生は、1月下旬に仙台市沿岸部を視察し、その後に復興ミュージカル「慶長使節団出帆」を視聴している。また8月下旬には本校学区において、地域住民と小・中学生が地域清掃活動を共にすることを通じて、大震災の時の共助を忘れず、地域の復興・復旧状況を確認している。</p> <p>③の防災・減災の知識、スキル、行動を習得するため、学区内の小・中学校の防災訓練を中学生が支援すると共に、本校では生徒が主導して地域防災訓練を行っている。</p> <p>④学習成果を発信するについては、ユネスコスクール東北大会で生徒会が成果発表をしたり、防災教育チャレンジプランにて本校の防災教育を実践発表したり、各種の発表会にて学習成果を発信している。さらに、ボランティア・スピリット・アワードにて、平成28年度は北海道・東北ブロックにてブロック賞、平成29年度はコミュニティ賞を受賞し、表彰式において生徒会が成果発表している。</p> <p>⑤として、学習内容と方法そして成果や課題などについて、自己評価、外部評価を生徒と教員が協働して実施し、防災教育チャレンジプランにて第三者評価を専門家・研究者からいただいている。</p>
<p>準備、使用したもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 人材 ・ 道具、材料等 	<p>【実践プログラムごとに記載】</p>
<p>参加人数</p>	<p>【実践プログラムごとに記載】</p>
<p>経費の総額・内訳概要</p>	<p>経費の総額：1,315,350円</p> <p>【内訳概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○津波被災地での視察・交流：バス借上料 494,207円 農業園芸センター会議室使用料 7,128円 ○講師 防災教育シンポジウム・講師謝礼 30,000円 講師旅費 25,840円 ○炊き出し ガス器具調査料・ガス料金等 26,028円 ガス器具・寸胴鍋等の備品代 314,020円 食材費(カレー、豚汁) 242,400円 割り箸・井・洗剤等消耗品費 81,606円



	○その他、印刷費・旅費等	94,121円
成果と課題	<p>この実践プログラム番号NO. 0は、平成29年度・年間の防災教育の実践概要とその流れを示し、実践プランの全体像を表している。その実践展開においては、“実践のねらい”を定め、</p> <ul style="list-style-type: none"> ①震災と教訓を学ぶ、 ②復興を知る・支援する、 ③防災・減災の知識、スキル、行動を習得する、 ④学習成果を発信する、 ⑤学習実践を評価する、 <p>これらの順にて構成し、本プランの目的達成に挑んでいる。したがって、本プログラムの成果や効果については、「6、成果と課題(実践したプラン全般について)」で記述する。</p> <p>なお、各実践プログラムの成果や課題については、実践プログラムごとに記載する。</p>	
成果物	<p>報告書「安全・安心な地域づくりに資する、中学生が主導する防災教育と地域防災訓練」</p>	

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： NO. 1】※3

タイトル	「津波被災農家の方々の講演」と「津波被災農家に弟子入り体験」
実施月日（曜日）	①津波被災農家の方々の講演 平成29年9月 6日(水) ②津波被災農家に弟子入り体験 平成29年9月12日(火)午後 ③津波被災地と震災遺構の視察 同上 ・午前
実施場所	講演：本校の体育館、弟子入り体験：仙台市若林区荒浜
担当者または講師	①と②担当者・講師等の区分：担当者・講師 氏 名： 渡邊 静男 所属・役職等：(株)荒浜アグリパートナーズ・代表取締役 ③担当者・講師等の区分：震災遺構の案内・説明 氏 名： 鈴木 憲一 他3名 所属・役職等：震災遺構・減災仙台市立荒浜小学校 嘱託職員
所要時間または「コマ数×単位時間」	① 14:00～15:30、② 13:00～16:00 ③ 9:00～12:00
プログラムのカテゴリ、形式※4	3 (講演会・シンポジウム)、4 (総合的な学習の時間)、 9 (校外学習・移動教室)、13 (体験学習)
活動目的※5	①と③：6 (防災に関する知識を深める) ②：10 (津波被害とその復興を知り、被災者を支援する)
達成目標	1、津波被災地の視察と被災者との交流や津波被災農家に弟子入り体験により、被災者の現状と心の変容、復興に向けた取組とその意欲・姿勢を知り、理解することにより、大震災の教訓を受け継ぎ、生徒自らが未来を切り拓き、生き抜く力の糧を学ぶ取る。 2、被災地視察と被災者との交流から、どんな困難や苦難にも立ち向かう力と勇気、そして強靱な心を培う。 3、本実践プログラムを通じて、生徒は“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ心と姿勢を変容させ、共助の心を通い合わせる豊かな人間性を育むことができる。
実践方法・進め方 (箇条書き またはフロー)	<p>① 津波被災農家の方々による講演</p> <p>中学1年生は大震災当時、小学校の低学年であり、大震災から6年が過ぎていることから、震災の状況や被害等の記憶や、継承すべき教訓等については、あまり定かな記憶にない。そこで、平成29年9月6日に1年生約200人が、仙台市沿岸部の若林区荒浜で津波により全てのものを消失した農家の被災者から講話をいただき、大震災前後や震災当時の状況、そして大震災から立ち直り、未来に向けて立ち向かう心情と努力、苦労などについて、講話から学ぶ取ることを目的に講演をいただいた。大震災から立ち直るまでの心境の変化や苦難と苦労など、農業再生・復興に向けた夢や希望、覚悟と意気込み等の講話をいただけた。生徒達は、農家の方々の力強い生き抜く姿と言葉から、どんな苦難にも逃げることなく、何があっても諦めることなく、未来に立ち向かう勇気</p>





と力を体感し、個々の生徒が心に刻み込み、これからの生きる力の糧を学び取ることができていた。

②・③ 1年生が津波被災地を視察し、津波被災農家に弟子入り体験

平成28・29年度ともに1年生・約200人が、仙台市沿岸部の津波被災地で農業を営む方々を支援するため、9月中旬に被災地を視察し、その後に綿花畑の除草作業を行っている。大震災前は広大な水田地帯であったものの、津波の塩害が残る中、稲作に変わり手作業で綿花を栽培している。両年度ともに、生徒たちは小雨が降るにも関わらず、懸命に除草作業に取り組んでいた。平成29年4月には、校舎2階まで津波被害で浸水した荒浜小学校が震災遺構として整備・公開され、展示物と津波襲来のDVDを視聴できる映写室等が完成し、大震災とその後の状況等を生徒達は学んでいる。



慰霊塔を訪問



〈平成29年4月に震災遺構として整備・公開された荒浜小学校を9月12日に視察〉



〈H29 記録的長雨で綿花畑が冠水・ハウスとネギ畑で農作業〉

平成28・29年度に実施している1年生の本実践活動について、アンケート調査を実施した結果、調査内容の全ての項目で選択肢“大いに”と“まあまあ”を合わせると概ね8割を超えている。以下に結果の一部を表に示す。

【1年生「津波被災農家に弟子入り体験」に関するアンケート調査結果】

NO	調 査 内 容	年度	大いに	まあまあ
1	大震災のマスコミ報道を受けて、大変なことが起きていることを感じる。	H28	85.6	13.1
		H29	94.3	5.7
2	震災のマスコミ報道を受け、被災者に対して自分が出来ることをしたいと思う。	H28	56.3	35.6
		H29	67.0	27.3
3	大震災のマスコミ報道を受けて、被災の状況をもっと知りたいと感じる。	H28	33.8	39.4
		H29	54.0	33.0
8	被災地を視察・支援して、被災地の復旧・復興に自分の力を活かしたいと思う。	H28	39.9	47.5
		H29	55.1	38.1
10	被災地を実際に視察・支援して、被災地のために、何ができるか考えたいと思う。	H28	41.9	40.6
		H29	54.0	35.8
12	今回の活動を通じて、このようなボランティア・交流は必要であると感じた。	H28	65.6	25.6
		H29	69.3	20.5



14	今回の活動を通じて、人が人を助けることは、大切なことだと感じた。	H28	79.9	18.9
		H29	83.5	12.5
21	これからの自分は、自分の夢や希望を持ち続け、頑張りたいと思う。	H28	79.4	15.6
		H29	78.4	18.8

この表から、生徒は時が過ぎてもマスコミ報道により、大変なことが起きていると感じ、被災状況を知りたがっていることが分かる。そして実際に被災地を視察・支援し、生徒は被災地の復旧・復興に自分の力を活かしたいと思い、何ができるか考えたいと年を増してより強く望んでいる。また、ボランティア交流の必要性和、人が人を助けることの重要性も年々増していることが分かる。さらに、N021は両年度とも選択肢“大いに”と“まあまあ”の割合を加えると95%以上であり、夢や希望を持ち続けて頑張る意欲を高めている。

次に、アンケート調査は21項目で行っており、平成28・29年度のそれぞれで、1年生の各項目間で相関分析を行った。相関表では、相関が認められる相関係数0.40以上の項目間に色づけしている。特に相関が示された調査内容を、上記の表に示されていない調査内容の項目を下記の表に記載する。

調査の視点	NO	調査内容
Ⅲ、今回のボランティア・交流活動を通じて	13	自分の力が人のために役に立って嬉しい
	15	どんな苦難にも立ち向かう勇気と力を感じた
Ⅳ、これからの自分について	16	これからも、人のために役立ちたい
	17	自分に出来ることを探し続け、チャレンジしたい
	18	人に夢や希望、勇気を与えられる人になりたい
	19	自分は人を助けたり、人と支え合ったりしていきたい
	20	どんな苦難にも立ち向かい、苦難を乗り越える努力をしていきたい

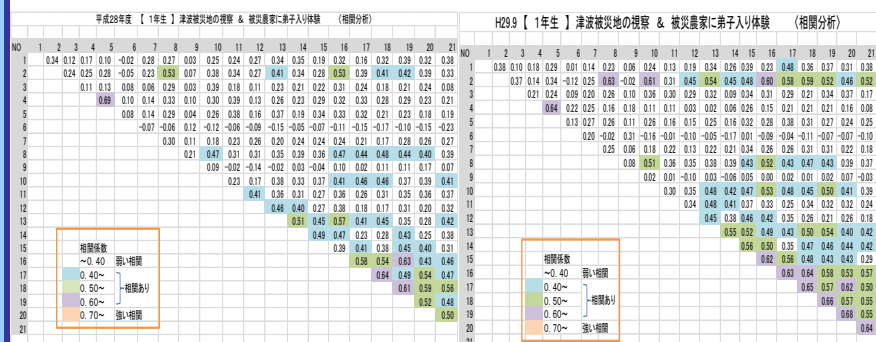
「これからの自分について」を調査しているN016～N021の6項目では、両年度ともに全ての6項目間で相関が示されており、H28年度よりH29年度でより相関係数が高まっている。このことは、津波被災地の視察や農家の復興支援と交流の体験学習により、生徒達はN016～N021の全ての6項目間の内容を、無意識的に相互に関与させ、これからの自分づくりに挑もうとしていることが分かる。

また、H29年度では、「今回のボランティアと交流を通じて」について調査したN013～N015の3項目を含めると、ほぼ全てのN013～N021の項目間で相関が示されている。このことからH29年度では、ボランティア・交流が「これからの自分」の意識・意欲等の変容に、影響をより強めていることが確かめられる。

さらに、H29年度の生徒については、N02「被災者に対して、自分が出来ることをしたいと思う。」、N013「自分の力が人のために役に立って嬉しい」、N016「これからも、人のために役立ちたい」の3項目が、21の全項目中、12項目と相関を示している。自分に出来ることをしたいという気持ちが、実際に復興支援をして役に立ったことを喜び、そしてこれからも人のために役立ちたいという決意に繋がっていることが確かめられた。

【平成28年度の1年生】

【平成29年度の1年生】





さらに「津波被災農家に弟子入り体験」学習では、生徒向けのアンケート用紙に保護者がコメントを記入する欄を設けている。保護者は、我が子のアンケート結果と体験学習の感想文を読み、コメントを記入することになる。以下には、H28 と H29 の両年度の抜粋したコメントを記載するが、ほぼ全ての保護者のコメントが本体験学習の実施を賞賛し、我が子の成長に喜びを感じ、夢や希望が持てたことに感謝するなど好意的なものであった。

【平成28年度の保護者コメント】

- 震災時は県外に住んでいたもので、こういう機会をいただき、自分の目で見て、聞いて、感じて、当時の様子を知れたのは、とても良かったと思います。生きたくても、生きられなかった同じ年頃の子供たちの分まで、精一杯、夢に向かって生きていってほしいです。
- 今回の校外学習で、改めて震災を見直すことが出来て、とても良い勉強になったと思います。命の大切さ、何かしてあげたいという気持ちなど、ふだん学校の授業で学びきれないことを、身を持って体感できたと思います。
- 自分たちは日常を取り戻すことが出来ますが、まだまだ困難な状況の中で、復興に向かって頑張っている人達がいるということを知る、いい機会になったと思います。今回の活動を通じて、どんな困難にも立ち向かい、希望を持って頑張ることの大切さを学んだと思います。
- “助け合っていくことは当たり前・・・”というところから、当たり前の感覚がちゃんと育っているなと感じました。常に当たり前の心を、当たり前に表現できる人でいてほしいと思っております。自身も夢や希望を持ち続け、周りの人へも夢、希望、勇気を与えられる人になってほしいと願っています。
- 震災を風化させず、社会に目を向け、少しでも役立ちたいと思えるような体験授業は、とても重要な機会だったと思います。今回のような体験が、子供たちがこれから生きていく中で、心の支えになるような場面も出てくるのではないかと思います。
- 東日本大震災は自分も経験していましたが、今、命が助かったことを、亡くなった人達の話などを見て聞いて、改めて命は尊いし、大切なんだと実感したようです。これから生きていく長い人生においても、考えさせられる良い体験だったと思います。一生懸命人生を過ごし、命を大切にしてほしいと思います。

【平成29年度の保護者コメント】

- 今回このような時間を設けていただき、改めて震災について、復興について、子供と一緒に考える良い機会となりました。まだまだ復興していないところもあり、このことを風化させることなく、家でも意識していきたいと思います。
- 津波被災地訪問をしたことで、普段から人を助けたいと考えようになったとのこと、大いに期待したいと思います。それと共に、今後起こるかもしれない大きな災害に備えて、家族で話し合うきっかけとなればと思います。
- 被災地を訪れ、改めて、家があり、家族があるということ、そして命の尊さを感じたのではないかと思います。天災を避けることはできませんが、備えること、日々を大切に過ごすこと、人との出会いを大切にすることはできます。前進する強い心、優しい心を学ぶ機会を持たせていただき、ありがとうございました。
- ボランティアをする機会は、今までありませんでした。今回の活動を通じて“人の役に立ちたい”と考え、実際に自分が“役に立った”と実感できたことは、大変素晴らしい経験になったと思います。
- 初めて被災地の現場を生で見て(自分の目で見て)、いろいろ感じたことがありましたね。実際に荒浜で被災に遭われた方々の気持



	<p>ちを考えると、お母さんも心が痛み、どれほど苦しかったことでしょうと、言葉では言い表すことができません。これからもずっと、被災地のために自分は何をすることができるか考えて、いつでも自分が必要な人とされるように、人のために助けてあげて下さい。お母さんの望みです。</p> <p>○良い経験をさせていただきました。自分の目で見て、聞くことで、新たに知ることができ、様々な感情に出会ったのではないかと思います。この災害を経験したことを後世に伝えることが義務となり、また自分の身を守ること、命の大切さを日々考えながら生きていける人間になってほしいと、心から思いました。</p>
準備、使用したもの ・ 人材 ・ 道具、材料等	<p>① 津波被災農家の方々による講演 ・ 人材：本校生徒1年生・約200人と教員9人 津波被災農家3人 ・ 道具・材料等：CPやプロジェクター等</p> <p>②・③ 津波被災地の視察と津波被災農家に弟子入り体験 ・ 人材：本校生徒1年生・約200人と教員9人 震災遺構の職員4人 ・ 道具：除草作業に必要な長靴、軍手、雨具など</p>
参加人数	<p>① 生徒と教員の約210人 ②・③ 生徒と教員の約210人、被災農家10人</p>
経費の総額・内訳概要	<p>○津波被災地での視察・交流：バス借上料 263,348円 ○農業園芸センター会議室使用料(昼食・休憩) 3,564円</p>
成果と課題	<p>【成果】 アンケート調査と保護者コメントの結果から、以下の3つの成果が得られている。</p> <p>○津波被災地の視察や交流と農家に弟子入り体験により、被災者の現状と心の変容や復興に向けた取組とその意欲・姿勢を知り、理解することにより、大震災の教訓を受け継ぎ、生徒自らが夢や希望を持ち続けて頑張る意欲を高めて未来を切り拓き、生き抜く力を学び取ることができた。</p> <p>○本プランによる防災教育を通じて、生徒は被災地の復旧・復興に自分の力を活かしたいと思い、何ができるか考えたいとより強く望み、“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ心と姿勢を変容させ、共助の心を通い合わせる豊かな人間性を育むことができた。</p> <p>○本実践プランが親子のコミュニケーションを生み出し、保護者がボランティアの必要性や、人が人を助けることの重要性を感じている我が子の心の成長を知る機会となることが出来た。</p> <p>【課題】 アンケート調査から、調査N01「大震災のマスコミ報道を受けて、大変なことが起きていることを感じる。」では、選択肢“大いに”の割合はH28が85.6%、H29が94.3%であることから、大震災から6年過ぎた現在でも、生徒はその猛威と恐怖、不安を抱いていることが分かる。本実践プログラム「津波被災地への支援活動」では、実際に被災地を視察し、その地で生活している方々と交流を図り、自らの生き抜く力の糧を学び、前に進む意欲と熱意を感じ取っている。しかし、それらが実際に起きたこと、起きていることとして、どれほど深く認知されたかは不明である。被災者の立場になって考え、想像し、苦しみや悲しみを感じ、そして自らのこれからの思い</p>



	を馳せ、自らが努力していくかが、一過性ではなく、真に生き抜く力の糧を学び取ったことの証になるものと考え。つまり、津波被災地への支援活動から学んだ思いと意欲が、生徒自らがこれからにどれだけ活かされ続けるかが大きな課題となると考える。
成果物	報告書「郡山中学校が小学校と地域と協働する防災教育活動プラン」

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： NO. 2】※3

タイトル	小・中学校と地域・行政との連携推進
実施月日（曜日）	(1) 学校と地域・行政等との防災会議 10月5日(木) (2) 小・中連携推進のための合同研修会 8月23日(水)
実施場所	(1) 郡山コミュニティセンター (2) 仙台市立東長町小学校
担当者または講師	(1) 担当者・講師等の区分：担当者 氏 名：関口 吉信 所属・役職等：郡山地区連合町内会長 (2) 担当者・講師等の区分：担当者 氏 名：高橋教義、福田喜美恵、佐藤貢、加藤 徹 所属・役職等：郡山中校長、①東長町小学校長、②八歩松小学校長、③郡山小学校長
所要時間または「コマ数×単位時間」	(1) 13:00～15:30 (2) 13:30～16:00
プログラムのカテゴリ、形式※4	(1) 17 (その他：本校避難所運営マニュアル改訂と中学生が主導する地域防災訓練の検討など) (2) 2 (講習会・学習会・ワークショップ)
活動目的※5	(1) その他：学校と地域が協働する本校避難所運営マニュアル作成 (2) その他：小・中学校が連携支援する防災教育や学力向上、生徒指導などの研修会
達成目標	○防災教育活動を通じて中学生の地域貢献の活性化を図り、小学校や地域に奉仕活動を展開し、小・中学生と住民が共に防災教育とその実践に取り組み、地域防災力の向上を図る。 ○学校と地域の共通目標である地域防災力の向上と安全・安心な地域づくりを目指し、共通目標の達成度を高めるため、両者による連合体を組織して連携・協働を推進する。
実践方法・進め方 (箇条書きまたはフロー)	<p>(1) 地域や行政等との防災会議 本校学区の防災・減災を推進するため、町内会と本校が主体となり、地域防災に係る関係機関が参加して防災会議を開催している。参加者・機関は、町内会長や中学校長をはじめとし、市役所、区役所、日赤奉仕団、婦人防火クラブ、民生児童委員、社会福祉協議会、PTAなどであり、地域の多様な組織が参加して地域防災の取組を推進ため、検討と協議を毎年行っている。今年度は本校の中学生が主導する地域防災訓練を中心に、連携いただく本会議の参加組織の方々と協議し、中学生等への連携・支援の在り方や昨年の住民アンケート調査結果等で課題となっている事項等を検討・協議している。昨年度の課題を解決する方策を協議し、今年度の中学生が主導する地域防災訓練にて、その方策を講ずることになった。さらに、避難所運営マニュアルの改訂版の検討と協議も行っている。</p> <p>(2) 小・中連携推進のための合同研修会 本校の中学校区内には3つの小学校があり、防災教育や学力向上、生徒指導等について連携推進を図るため、毎年の夏季休業中に4校</p>





	<p>の小・中学校の全教員を対象にした合同研修会を開催している。はじめに全体会を開き、校長や担当教員が小・中学校4校のそれぞれの教育実践の取組概要や防災教育などの特色ある教育活動、各校の現況等について研修と情報交換を行っている。本年度の全体会において、本校の校長が防災教育の取組を発表している。</p> <p>毎年、全体会に続いて、現職研修、学力向上、生徒指導、特別活動・特別支援教育の4分科会を開催し、各校の取組状況や課題等の解決に向けた連携とその実践の在り方・推進方法などについて研修と協議や検討を行った。分科会後に再び全体会を開催し、各分科会の研修内容の報告を行い、今年度の防災教育等での連携推進事業を確認し、閉会している。 【各分科会の様子】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>【平成29年度の全体会】</p> <p>中学校の防災教育を校長が発表</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>学力向上</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>特別支援教育</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>現職研修</p>  </div> </div>
準備、使用したもの ・ 人材 ・ 道具、材料等	<p>(1) 学校と地域・行政等との防災会議 人 材：町内会長、中学校長、社会福祉協議会、日本赤十字社、民生委員、児童委員、婦人防火クラブ、行政(市役所・区役所)、父母教師会等</p> <p>(2) 小・中連携推進のための合同研修会 人 材：小・中学校の全教員 材料等：全体会の資料(中学校からは、地域防災訓練の配布資料)各分科会の配付資料</p>
参加人数	(1) 18人 (2) 小学校71人、中学校35人、計106人
経費の総額・内訳概要	(1)と(2)ともに0円
成果と課題	<p>【成果】</p> <p>○防災教育活動を通じて中学生の地域貢献の活性化を図り、小学校や地域に奉仕活動を展開し、小・中学生と住民が共に防災教育とその実践に取り組み、地域防災力の向上を図る一助になっている。</p> <p>○学校と地域の共通目標である地域防災力の向上と安全・安心な地域づくりを目指し、共通目標の達成度を高めるため、両者による連合体を組織して連携・協働を推進する礎が構築できた。</p> <p>【課題】本校は2つの連合町内会(郡山と八本松)があり、本校が開催する11月の「中学生が主導する地域防災訓練」には郡山連合町内会との連携ができています。しかし、八本松連合町内会は10月に八本松小と連携して行っているため、中学校区で一斉の訓練ができず、昨年度来からの課題となっている。</p>
成果物	(1) 郡山中学校区・平成29年度避難所運営マニュアル改訂版

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。



【実践プログラム番号： NO. 3 】※3

タイトル	大震災の教訓を受け継ぐ実践活動
実施月日（曜日）	(1) 集団避難訓練と集団下校訓練 集団避難訓練：4月27日(水)、 集団下校訓練：7月1日(金) (2) 1年生・ハザードマップ作成と発表会 11月 1日(水) (3) 気象庁・緊急地震速報による訓練：シェイクアウト訓練 11月14日(火) (4) 故郷復興プロジェクト：平成29年3月17日(金) 平成30年3月16日(金)
実施場所	(1)～(4)：本校及び本校学区
担当者または講師	(1) 担当者・講師等の区分：担当者 氏 名：若生 知宏 所属・役職等：防災主任 (2) 担当者・講師等の区分：担当者 氏 名：相馬、橋本、乗田、木村 他5人 所属・役職等：1学年所属教員 (3) 担当者・講師等の区分：担当者 氏 名：若生 知宏、他全教職員37人 所属・役職等：防災主任 (4) 担当者・講師等の区分：担当者 氏 名：高橋 悠真 所属・役職等：本校の生徒会担当
所要時間または「コマ数×単位時間」	(1) 集団避難訓練 2時間、集団下校訓練 4時間 (2) クラスごとに 事前調査 4時間、マップ作成 2時間、発表 1時間 (3) 訓練 5分、全校集会 1時間 (4) 2時間
プログラムの カテゴリ、形式※4	(1)：16(避難・防災訓練) (2)：2(講習会・学習会・ワークショップ) (3)：16(避難・防災訓練)、3(講演会・シンポジウム) (4)：1(イベント・行事)
活動目的※5	(1)：4(災害を想定した訓練) (2)：2(防災に役立つ資料・材料づくり) (3)：9(災害対応能力の育成) (4)：3(災害に強い地域をつくる)
達成目標	○中学生が集団避難訓練や集団下校訓練を行うことで、自助と共助の術を身に付け、大震災の教訓として常日頃からの心構えと訓練がいかに必要かつ重要かを認識し、教訓を継承する。 ○地域に潜む防災上の危険箇所を発見し、他者とその情報を共有することで、防災・減災と自他の身を守る術を学び取る。 ○緊急地震速報を理解するとともに、その速報を見聞きしたときの行動として周りの人に声をかけながら「周囲の状況に応じて、あわてずに、まず身の安全を確保する」ことを学ぶ。さらにシェイクアウト訓練として地震の際の安全確保行動1-2-3「まず低く、頭を守り、動かない」訓練を身に付ける。



実践方法・進め方 (箇条書き またはフロー)

○、毎年度末に各学校が独自の実施内容を創意・工夫して全校集会を開き、大震災の犠牲者を偲び、大震災の風化を防ぎ教訓を受け継ぐ。

(1) 集団校庭避難訓練[4月]と集団下校訓練[7月]を継続実施

毎年4月と7月には、地震や火災を想定した、教室等の校舎内から校庭への避難訓練を行っている。東日本大震災の教訓として、常日頃からの心構えと訓練が、いかに重要かを認識し、教訓を継承している。生徒たちは、災害発生時に訓練が実際に生かされるため、訓練に真剣で冷静に取り組み続けている。

[毎年4月実施の集団校庭避難訓練の様子]



次に、毎年7月に実施している集団下校訓練は、全校生徒・約600人が、災害や非常事態の際に、教員の引率の元で、ともに助け合い、安全を確保しながら帰宅するために行っている。

まず、18地区ごとに生徒の人数を確認し、下校で注意すべき場所等を確認し、その後に全校生徒が集い、訓練の目的・内容・注意事項を確認し合い、集団下校の訓練を行う。今年の集団下校訓練も、以下のように列が乱れることもなく、整然と行うことができています。

[毎年7月実施の集団下校訓練の様子]

【地区ごとの集会の様子】



【全校集会の様子】



【集団下校訓練の様子】



それぞれの訓練の自己評価は、4件尺度法で10項目からなる質問紙で調査しており、数値は選択肢A“大いに”、選択肢B“まあまあ”の割合を示している。

まず、平成27年度に入学した生徒が、1年生から3年生までにどの程度の自己評価なのか、経年比較を以下の表に示す。なお、4月は地震想定訓練、11月は火災想定訓練である。

選択肢“大いに”と“まあまあ”を加えると、**NO9「自分のことだけでなく、他の人のことも考えて避難できた」**を除くと、それ以外の調査項目が80%を超えている。以下の表中の項目は、特に割合が高いか、訓練回数を重ねるごとに“大いに”の割合が高まっている項目である。

NO	自己評価の内容	1年時		2年時				3年時	
		H27.11		H28.4		H28.11		H29.4	
		A	B	A	B	A	B	A	B
1	避難訓練の校内放送を静に聞く	74.0	23.8	73.9	24.4	86.0	13.5	92.5	6.9
2	学級の避難経路を確認する	86.7	12.7	89.8	7.4	82.0	12.4	95.4	4.0
3	先生の指	76.2	22.1	83.4	15.4	83.1	16.9	94.8	5.2



	示に従い、避難する								
5	無駄話をしないで避難する	43.6	43.6	45.1	46.9	53.9	37.6	64.7	30.6
6	避難後の整列を速やかに出来た	55.2	42.5	64.8	30.7	73.6	23.6	79.1	19.8
10	避難訓練全体を真剣に取り組む	52.0	43.0	64.0	32.0	68.5	30.9	82.1	16.2

NO 5・6・10 の3項目は、訓練回数を重ねるごとに”大いに”の割合が高まっている項目であり、出来るだけ無駄話を控え、避難後の整列を速やかにし、訓練全体を真剣に取り組むように、徐々に成長していることが分かる。また、NO 1～3 の項目では、高い割合を示し、特に H29.4 には選択肢“大いに”が 90%を超え、校内放送を静に聞き、避難経路を実際に確認し、先生の指示に従って避難をしていることが分かる。ただし NO 9 の選択肢“大いに”の経年比較については、24.7→23.8→20.8→29.8%と低い割合で推移している。しかし、他の人のことも考えて避難すること、については集団で避難することを考えると、特に狭い廊下や階段での避難について注意することが必要であることから、今後も指導を続けることが大切であると考えます。

(2) 1年生による「学区内ハザードマップ作成」

1年生6クラスの約200人はクラスごとに、近隣に住む生徒が班に分かれて、洪水が起きそうな箇所や地震の揺れで危ない場所などの危険な所を前日までに確認して見つけ出し、学区内の地図に記入してハザードマップを作成している。そして、作成したマップをもとに、クラス内で班ごとに発表会を行った。



各クラスで作成したハザードマップは、廊下に掲示して他のクラスの生徒が共有できるようにしている。それぞれが独自の視点と観点から書き上げたマップは、他の生徒が気づかない危険箇所の発見に役に立っている。

以上のように本校では、生徒がこの体験学習の実践活動をする中で、未曾有の地震・津波に対する教訓を風化させることなく、後の世代に受け継ぎ、地域の災害文化の構築の一助を担う体験学習活動として、学校や地域にとって必要かつ重要な教育実践として位置づけ、継続している。

(3) 全校生徒が「気象庁 緊急地震速報による訓練：シェイクアウト訓練」を実践

気象庁では11月1日に緊急地震速報の全国的な訓練を実施しており、本校でも訓練に参加している。実施日は学校行事等の都合により、11月14日の14:20に訓練を開始した。以下のように、生徒達は緊急地震速報を受け、シェイクアウト訓練として安全確保行動1-2-3「まず低く、頭を守り、動かない」を身に付ける訓練を行った。



	<div data-bbox="531 237 1401 456"> </div> <p>訓練後には、気象庁が製作した「緊急地震速報受信時・対応行動訓練キット」の動画を視聴し、訓練を省みる学びを行った。その後に校長は、シェイクアウト訓練が世界中で行われ、日本でも平成29年には600万人を超える大規模な地震防災訓練であることなど、本訓練の意義と有効性等について説明を行った。</p> <p>(4) 各校独自の内容で故郷復興プロジェクトを毎年3月に実施</p> <p>全ての仙台市立学校では、2011年3月11日を風化させず、大震災の教訓を受け継ぐために、各校独自の実施内容を創意して本プロジェクトを実施している。本校では生徒会が司会進行して全校集会を開き、仙台市中学校長会が製作した復興DVD「ともに、前へ」を視聴し、その後に仙台市中学校の復興ソングを全校生徒で合唱している。生徒会役員がプロジェクトの開会と閉会のあいさつを述べ、全校生徒が毎年震災への思いを新たにしている。復興DVDには大震災当時の災害や避難救助の様子、避難所や仮設住宅での生活、各中学校被災と中学生の奉仕活動等の写真映像が記録されている。また、震災後の各学校の防災教育の実践が写真で収録されており、これまで以下のサブタイトルが付記された三部作が制作され、全ての仙台市立中学校で活用されている。</p> <p>第1集「ともに、前へ～過去から未来を創ろう、中学生の力で～」 第2集「ともに、前へ～支え合い、助け合い、未来を創ろう、中学生の力で～」 第3集「ともに、前へ～夢と希望があふれる未来を創ろう、中学生の力で～」</p>
<p>準備、使用したもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 人材 ・ 道具、材料等 	<p>(1) 集団避難訓練と集団下校訓練 人材：各地区役員の生徒 道具、材料等：特になし</p> <p>(2) 1年生による「学区内ハザードマップ作成」 人材：本校1年生と1学年所属教員 道具、材料等：学区内地図が印刷された模造紙、マーカーペンなどの筆記用具</p> <p>(3) 全校生徒が「気象庁 緊急地震速報による訓練：シェイクアウト訓練」を实践 人材：全校生徒 道具、材料等：CP、プロジェクター、スクリーン</p> <p>(4) 故郷復興プロジェクト 人材：生徒会役員が司会進行・運営 道具、材料等：CP、プロジェクター、スクリーン</p>
<p>参加人数</p>	<p>(1)・(3)・(4)：全校生徒約600人 (2)：1年生約200人</p>
<p>経費の総額・内訳概要</p>	<p>0円</p>



<p>成果と課題</p>	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○中学生が定期的な訓練を行うことで、自助と共助の術を身に付け、大震災の教訓として常日頃からの心構えと訓練がいかに必要かつ重要かを認識し、教訓を継承することができる。 ○地域に潜む防災上の危険箇所を発見し、他者とその情報を共有することで、防災・減災と自他の身を守る術を学び取ることができる。 ○緊急地震速報を理解するとともに、その速報を見聞きしたときの行動として周りの人に声をかけながら「周囲の状況に応じて、あわてずに、まず身の安全を確保する」ことを学ぶことができる。さらにシェイクアウト訓練として地震の際の安全確保行動1-2-3「まず低く、頭を守り、動かない」訓練を身に付けることができる。 ○大震災発生時期にあわせ、各学校が独自の実施内容を創意・工夫して全校集会を開き、大震災の犠牲者を偲び、大震災の記憶の風化を防ぎ、大切な教訓を後世に受け継ぐことができる。 <p>【課題】</p> <p>○避難訓練では、弱者に配慮などの思いやりが多少不足した結果となっており、弱者を助けたりする行動に結び付かない行動が懸念される。また、無駄話をしないで避難する調査からは、整列・人数確認を遅らせる結果となっており、逃げ遅れた生徒がいるか否かを、迅速に判断することに多少なりとも支障をきたすことに繋がっている。次回の訓練では解決すべき課題として、生徒一人一人が肝に銘じるよう反省をするとともに、弱者への配慮不足や無駄話をするのがどんな結果を生むかを、生徒一人一人が理解させ、弱者を考え無言で行動できるように、さらに指導を徹底することが必要である。</p>
<p>成果物</p>	<p>○アンケート集計・分析とその検証結果の報告書</p>

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。



【実践プログラム番号： NO. 4 】 ※3

タイトル	防災教育の成果を外部発信（防災教育の実践校の拡充を目指して）
実施月日（曜日）	(1) 地元新聞社発行「河北ウイークリーせんだい ジュニア 2017年夏号」に本校の防災教育が掲載 (2) ちゅうでん教育大賞・表彰式 10月14日(土) (3) ユネスコスクール東北大会 11月10日(金) 全国大会 12月2日(土) (4) ボランティア・スピリット賞 11月19日(日) (5) 宮城県教育公務員弘済会教育研究論文・表彰式 11月30日(木) (6) 防災教育チャレンジプラン中間報告 10月10日(土)・11日(日) 最終報告会 2月17日(土)
実施場所	(1) 宮城県内 (2) 名古屋市 (3) 11月：仙台市、12月：福岡県大牟田市 (4) と(5) 仙台 (6) 東京
担当者または講師	(1) 担当者・講師等の区分：河北新報社記者、校長、生徒会役員 氏 名：高橋教義、生徒3人 所属・役職等：校長、生徒会の会長・副会長 (2)・(5) 担当者・講師等の区分：学校代表 氏 名：高橋教義 所属・役職等：本校校長 (3)・(4) 担当者・講師等の区分：学校の代表生徒・生徒会役員 所属・役職等：前生徒会長(3年生)、生徒会副会長(2年生)等 ※(3)東北大会では2年5組36人が合唱披露 (6) 担当者：本校の防災教育の関係教員 氏 名：相馬健一郎、前田政夫、若生知宏、高橋悠真、高橋教義 役 職：学年主任、防災主任、生徒会担当、校長
所要時間または「コマ数×単位時間」	(1) 取材時間・約2時間 (2) 表彰式・対象受賞校の発表 約2時間 (3) 合唱2曲と生徒会の発表で約50分 (4) 代表生徒への表彰とインタビューで約10分程度 (5) 表彰式 約1時間 (6) 実践プランの成果発表 10分、ポスターセッション 約40分
プログラムのカテゴリ、形式※4	1 (イベント・行事)、2 (講習会・学習会・ワークショップ)、 17 (その他：校外に学習成果を発信・第三者評価)
活動目的※5	10 (その他：防災教育の実践校の拡充、本実践プランの第三者評価によるプラン改良・進化の企画構想)
達成目標	○生徒が主導する防災教育の実践とその学習成果を、生徒自らが外部に発信し、専門的な立場の有識者から第三者評価を受けて、実践と学習活動に新たな創意・工夫を取り入れて企画を構想する。 ○本プランの実践成果等を生徒や教員が積極的に外部に発信し、被災地復興の支援を他者にも拡充し、他校等との防災教育の交流による実践プランの改革・進化を図る。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	(1) 地元新聞社発行「河北ウイークリーせんだい ジュニア 2017年夏号」に本校の防災教育が掲載 河北新報社は、中学生と家族を応援する情報紙を発行しており、本校が実践している防災教育が特集された。本校は平成29年3月にジャパン・レジリエンス・アワード(強靱化大賞)2017において、特別賞(佐々木則夫賞・元なでしこジャパン監督)を受賞している。学校と地域が協働し、中学生が主導する防災教育の取組が評価されたものであり、本校が実践している多様な体験的活動に基づく防災教育の取組が、以下のように新聞記事で紹介された。

[illegible]

(2) ちゅうでん教育大賞・表彰式 10月14日(土)

本校は、公益財団法人ちゅうでん教育振興財団が主催する「第16回ちゅうでん教育大賞」に応募し、優秀賞を受賞した。この教育大賞は小・中学校における教育実践に関する論文を審査・顕彰するもので、実践の内容と論文のまとめ方の双方が審査対象となっている。審査委員の講評では、「今年度の応募論文は質的に高い水準の教育実践が目立った。優秀賞の仙台市立郡山中学校の教育実践は、教員グループによる“支える人”への自覚を促した防災の担い手育成教育であり、様々な地域のセクターとの連携、体験的学びを通した防災教育指導の汎用性を目指した取組をまとめた優れた論文である。防災教育の進展が期待される今日、よいモデルとなる論文である。」との評価をいただいた。

そして、本校の論文は当財団のホームページに掲載されるとともに、事項に示すように当財団が発行する文化芸術情報誌「New えるふ Vol.15 Autumn&Winter 2017」平成29年11月に2ページにわたり本校の教育実践が掲載された。

さらに、本校の実践に対しては、当財団が行っている「ちゅうでん教育振興助成」にも採択されて教育助成金を贈呈されている。このような当財団からの支援をいただき、今年度本校の教育実践は、より活動の幅を広げて、防災教育の実践を拡充することが出来た。

[illegible]

(3) ユネスコスクール東北大会にて成果発信

ユネスコスクール東北大会は、ユネスコスクールに加盟又は加盟申請した小・中・高の学校と大学等の関係機関が集い、ESD の教育成果の交流や情報共有などのために、毎年、宮城教育大学にて開催されている。本校では平成27年度にユネスコスクール加盟の申請を行い、本大会にて平成27年から2年生クラスによる合唱披露と、生徒会による防災学習活動の実践発表を行っている。

そして、平成28年度にはその成果が評価され、ユネスコスクール実践大賞を受賞している。



【2年5組の生徒が合唱コンクールでの自由曲と仙台市復興ソングの2曲を合唱披露】

【生徒会が防災学習の取組と成果をプレゼン】

【大会会長から実践大賞を授与】

以下の写真は、平成29年度にも2年2組が参加し、校内合唱コンクールで披露した曲と仙台市の復興ソングの合唱を披露している。そして、生徒会役員が本校の防災学習の実践発表を行っている。



全国大会が12月2日(土)に福岡県大牟田市で開催され、本校の防災教育がESD大賞の特別賞を受賞している。また、本大会を主催しているNPO法人日本持続発展教育推進フォーラムでは、ESDに取り組む全国の学校への情報共有のため、受賞校の取組を冊子にまとめて配布しており、本校の防災教育も5ページにわたり掲載され、全国に取組が発信される。

(4) ボランティア・スピリット賞にて成果発信

：平成28・29年度の連続入賞

「ボランティア・スピリット賞」は、米国最大級の金融サービス機



関プルデンシャル・ファイナンシャルが 95 年からアメリカにて開始した青少年を対象としたボランティアを支援する制度である。現在ではアメリカ、日本、韓国、台湾、アイルランド、インド、中国、ブラジルで表彰式が開催され、それぞれの国からボランティア大使が選出される。本校生徒の防災教育に関する奉仕活動が、平成 28 年度には北海道・東北ブロックでブロック賞に入賞し、ブロック大会で札幌、全国大会で東京にて代表生徒が成果を発表している。しかし、平成 29 年度はコミュニティ賞に入賞し、北海道・東北ブロック大会にて実践報告するに留まっている。右上の写真は、平成 28 年度の東京にて開催された全国大会の様子である。



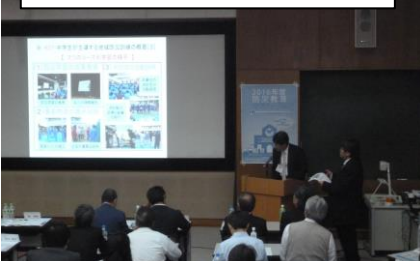
(5) 宮城県教育公務員弘済会教育研究論文・表彰式 11 月 30 日(木)

公益財団法人の日本教育公務員弘済会宮城支部では、未来を担う心身共に健全なみやぎの子どもの育成を目指した教育実践研究論文を募集して表彰をしており、本校の論文「防災教育を通じて自助と共助を育み、生徒指導問題の解消を目指す実践・実証研究～防災教育といじめ抑止教育の融合～」と題し、応募した結果、優秀賞を受賞している。

(6) 防災教育チャレンジプランの中間報告と最終報告会での実践報告

本校は平成 28・29 年度に内閣府等が主催している防災教育チャレンジプランに採択を受け、両年ともに 10 月に東京大学地震研究所を会場にして行われた中間報告会で実践成果を発表している。また、平成 28 年度には本校校長が分科会のパネラーとして本校の防災教育の実践内容やその成果を述べると共に、視聴者からの質疑に答えている。【会場：東京大学 地震研究所】

担当教員の実践成果の発表

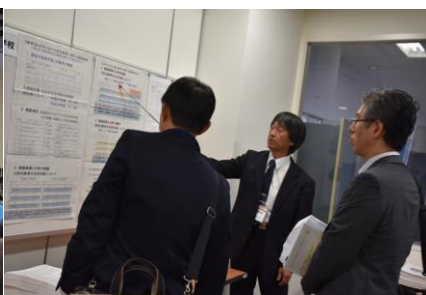


校長がパネルディスカッション



平成 29 年度には、2 名の教員が本校の防災教育の中間報告を行うと共に、校長が仙台市の全教員を対象にした防災教育のアンケート調査の分析結果を、補助資料と共にポスターセッションにて公表・発表している。

[※上記の 2 枚の写真は平成 28 年度、以下の写真は平成 29 年度のものである。]



準備、使用したもの

人材：本校の生徒や教員
道具、材料等：C P、プロジェクター、スクリーン、ピアノ




・人材・道具、材料等	発表資料
参加人数	(1) 地元新聞社発行「河北ウイークリーせんだい ジュニア 2017 年夏号」 本校の防災教育が掲載： 【宮城県内に 47,000 部発行】 (2) ちゅうでん教育大賞・表彰式 10 月 14 日(土) 約 200 人 (3) ユネスコスクール東北大会 11 月 10 日(金) 約 150 人 全国大会 12 月 2 日(土) 約 920 人 (4) ボランティア・スピリット賞 11 月 19 日(日) 約 300 人 (5) 宮城県教育公務員弘済会教育研究論文・表彰式 約 120 人 (6) 防災教育チャレンジプラン中間報告 10 月 10 日(土)・11 日(日) 最終報告会 2 月 17 日(土)
経費の総額・内訳概要	0 円 (各主催者から旅費の補助を受けているため)
成果と課題	【成果】 ○生徒が主導する防災教育の実践とその学習成果を、生徒自らが外部に発信することで、他校などに実践成果を広めることが出来るとともに、生徒のプレゼン能力を培うことが出来る。そして、本実践プランが専門的な立場の有識者から第三者評価を受け、実践成果の評価をいただき、生徒によるプランの改善と更なる創出を図ることが出来る。 ○本プランの実践成果等を、生徒や教員が積極的に外部に発信し、今後、被災地の復興支援の拡充の可能性や、他校等との防災教育の交流による実践プランの改革・進化を図れることが期待できる。 【課題】 ○今後、第三者評価等の結果に基づいて、生徒と教員が本実践プランの方法と内容や学習活動に、新たな創意・工夫を取り入れて企画構想していきたい。 ○本プランにおける被災地復興の取組を、他に周知することだけで支援の拡充が高まるとは限らないことから、他に積極的に呼びかけて支援の輪を広げる必要がある。 ○他校等との防災教育の交流により、本プランに欠けている“もの・こと・人”を明らかにし、それが実践プランの改革・進化に繋がれるかが、これからも課題視し続けなければならない。
成果物	○本校の防災教育の報告書・応募資料 ○他校等の発表資料等の収集 ○人との交流による人的ネットワーク財産の構築 ○第三者評価による評価結果、さらには生徒の発表の達成感と評価結果の喜び、受賞の感激に伴う本校生徒の防災教育等の学習推進意欲の向上

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： NO. 5】※3

タイトル	中学生が小学校・地域と協働する防災訓練の支援活動
実施月日（曜日）	(1) 学区内の市民センターと八本松小学校が開催する地域防災訓練の参加支援 平成29年10月14日(土) (2) 仙台市が主催する郡山小学校とその地域で実施する津波防災訓練に参加支援 平成29年7月1日(土)、11月5日(日) (3) 東長町小学校が行う防災活動を本校の地域防災訓練の一環として中学生が参加支援 11月18日(土)
実施場所	(1) 八本松市民センターと八本松小学校 (2) 郡山小学校と郡山コミュニティセンター (3) 東長町小学校と本校・郡山中学校
担当者または講師	(1) 担当者・講師等の区分：担当者 氏 名：三野宮 利男(連合町内会長) 所属・役職等：八本松連合町内会長 (2) 担当者・講師等の区分：仙台市危機管理室 氏 名：関口 吉信(連合町内会長) 所属・役職等：郡山地区連合町内会長 (3) 担当者・講師等の区分：東長町小学校・教職員 氏 名：高橋教義、福田喜美恵、 所属・役職等：郡山中校長、東長町小学校長 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">本中学校区は2つの連合町内会からなり、3つの小学校がある。</div>
所要時間または「コマ数×単位時間」	(1) 8:00～13:30 (2) 7:30～11:30 (3) 8:00～9:30
プログラムのカテゴリ、形式※4	(1) 16(避難・防災訓練)、13(体験学習)、2(講習会、学習会、ワークショップ) (2) 16(避難・防災訓練)、13(体験学習)、2(講習会、学習会、ワークショップ) (3) 16(避難・防災訓練)、13(体験学習)、2(講習会、学習会、ワークショップ)、3(講演会、シンポジウム)
活動目的※5	(1) 3: 災害に強い地域をつくる (2) 4: 災害を想定した訓練、 (3) 9: 災害対応能力を育成
達成目標	○小・中学生と住民が、共に防災教育とその実践に取り組むことを通じて、防災・減災の知識・スキル・行動を学び、自助と共助を育み、地域防災力と防災意識の向上を図る。 ○防災教育活動を通じて、中学生による地域貢献活動を活性化し、生徒の奉仕的精神を培い、地域住民との世代を超えた関わりと絆を育む。 ○中学生が東日本大震災の記憶と教訓を学び継承し、防災教育を通じて地域の防災を担う人材を育成する。 ○学校と地域の共通目標である地域防災力の向上と安全・安心な地域づくりを目指し、共通目標の達成度を高めるため、両者による連合体を組織して連携・協働を推進する。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	右の写真は平成28年度に本校と小学校、地域が共同して開催した地域防災訓練の様子である。小・中学生や住民が本校を目指し、一時避難所から集団避難訓練を行って、本校校庭に集合した写真である。 

しかし、平成29年度は仙台市防災推進課が本校中学校区内の一つの小学校を指定し、行政主導で小学校とその地域と連携して津波被害による防災訓練を行うこととなり、小・中学校が協働する地域防災訓練を同日に行うことが出来なかった。



このよう状況下においても、平成29年度に本校では例年通りに住民参加型で、中学生が主導する地域防災訓練を実施している。このため、同日に開催して行うことが出来なかった小学校を含めて、本校学区内の三つの小学校の防災訓練には、以下のように中学生が分担支援を行う形で参加している。

(1) 八本松小学校とその市民センターが開催する地域防災訓練に参加・支援

①訓練の概要

- ・ 集団避難訓練：一時避難所から補助・指定避難所をへて小学校や市民センターへ集団避難
- ・ 本校の中学生が避難所開設・運営と以下の各種訓練などを支援
AED 訓練、救護手当訓練、発災対応訓練、防災機器操作訓練、炊き出し訓練、消火器訓練、濃煙体験、防災クイズ・DVD 視聴

②参加者・・・住民：879人、本校生徒：75人、小学生：346人、
総計1,300人

③実施日 平成29年10月14日

④参加団体・組織等・・・町内会、社会福祉協議会、地区民児協、児童館、PTA、子供会、地域包括支援センター、太白区役所、仙台市、消防署、消防団、企業、



【受付会場等の設営】 【アルファ米によるお握りづくり】 【避難所で代表生徒が挨拶】

⑤参加した住民のコメントの抜粋

- ・ 防災訓練そのものも充実していたと思いますが、地域の人と人のつながりが深まり、顔見知りになるなど、実際の災害時に役立てると思いました。
- ・ 地域が一体となり防災活動の意識が高まることは大切なことと感じました。
- ・ 中学生のあいさつがとても心に残った。素晴らしかった。
- ・ 小学生、中学生が一生懸命の様子に頼もしく思いました。
- ・ 中学生が一生懸命やっていたこと。
- ・ 男子中学生の方々と一緒にご飯の詰め方をしましたが、なかなか一生懸命に頑張っている姿が頼もしく思いました。
- ・ 子供たちの消火器訓練、活気があって良かった。
- ・ 中学生の活躍が素晴らしかった。実に頼もしいですね、勉強にな



りました。有り難うございます。

(2) 仙台市が主催する郡山小学校とその地域で実施する津波防災訓練に参加支援

①訓練の概要

- ・ 訓練メールの発信・受信訓練
- ・ 集団避難訓練：一時避難所に集合し、小学校へ向けて集団避難
- ・ 各教室で行われる防災出前授業を参観
- ・ 本校の中学生が防災訓練体験(バケツリレー、トイレ組立と参加者への説明、DVD視聴など)と防災備蓄倉庫の物資確認などを支援

②参加者…住民：161人、本校生徒：26人、小学生：230人、
総計417人

③実施日 平成29年7月1日(土)、11月5日(日)
(仙台市津波防災訓練として共催)



【中学生が小学校に避難】【中学生等が備蓄物資の運び出し】【中学生が仮設トイレの組立】

【中学生が仮設トイレの説明】【小中学生がバケツリレー】【中学生が仮設トイレの片付け】

(3) 東長町小学校が行う防災活動の支援と郡山中学校の地域防災訓練の一環として支援

①訓練の概要 (小学校と中学校が同日開催)

- ・ 小学校へ集団避難訓練：一時避難所から東長町小学校の補助避難所へ集団避難
- ・ 本校の中学生134人が小学校の防災備蓄倉庫から物資を運び出して確認作業を支援
- ・ 中学校へ集団避難訓練：小学校の支援活動後に中学校へ集団避難

②参加者(郡山中学校の地域防災訓練を服務人数)

住民：148人、保護者：62人、本校生徒：582人、
学校支援組織：33人、大学等の他から参加者・視察者(宮城教育大学13人、埼玉志木市7人、他校4人)：24人、
教職員：42人 総計891人

③実施日 平成29年11月18日(土)



小学校校庭に避難・集合

防災備蓄倉庫から物資を運び、体育館で物資の確認作業



準備、使用したもの ・ 人材 ・ 道具、材料等	(1) 地域と市民センター、小学校が開催する地域防災訓練の支援 人材 : 小・中学生、住民、地域組織・団体等、企業、行政等 材料等 : AED、発電機、備蓄物資、仮設トイレ、炊き出し器材、DVD、パソコン、プロジェクターなど (2)・(3) 小・中学校と地域・行政等が協働する地域防災訓練 人材 : 小・中学生、住民、地域組織・団体等、企業、行政等 材料等 : AED、発電機、備蓄物資、仮設トイレ、炊き出し器材、DVD、パソコン、プロジェクターなど
参加人数	(1) 1, 300人、(2) 417人、(3) 891人
経費の総額・内訳概要	(1)・(2) 町内会費と行政の補助 (3) 664, 054円
成果と課題	【成果】 ○ 本校生徒が、自主的に自らが卒業した小学校において防災教育活動に参加・支援し、小学校とその地域に積極的に奉仕活動を行うことで、中学生の地域貢献の活性化を図ることが出来る。 ○ 本校生徒が自らの地域で行う防災訓練を通じて、地域における世代を超えた交流が図られることで、小・中学生と住民が地域の絆づくりに資することができる。 ○ 学校と地域の共通目標である地域防災力の向上と安全・安心な地域づくりを目指し、共通目標の達成度を高めるため、学校と地域が連携・協働を推進する礎を築くことが出来る。 【課題】 本校は2つの連合町内会(郡山と八本松)があり、本校が開催する11月の「中学生が主導する地域防災訓練」には郡山連合町内会との連携ができています。しかし、八本松連合町内会は10月に八本松小と連携して行っているため、中学校区で一斉の訓練ができず、平成27年度来からの課題となっている。
成果物	○ 郡山中学校・避難所運営マニュアルの改訂版

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。


【実践プログラム番号： NO. 6 】 ※3

タイトル	中学生が主導する地域防災訓練と防災教育【メイン実践プラン】
実施月日（曜日）	訓練実施日 11月18日(土)
実施場所	集団避難・防災訓練の会場：本校(体育館、校舎、校庭等)、 一次避難場所：東長町小学校、郡山小学校、八本松公園
担当者または講師	<p>〈コース別学習 午前開催〉 担当者・講師等の区分：講師 氏 名： 岩渕佳文、渕上隆夫 所属・役職等：仙台管区気象台 予報官、地球温暖化情報官</p> <p>〈防災教育シンポジウム 午後開催〉 担当者・講師等の区分：講師、助言者 氏 名：森本晋也・沼崎 健、丸山 淳 所属・役職等：岩手大学准教授・学生、仙台市教育委員会</p>
所要時間または「コマ数×単位時間」	訓練日 8:15～16:50 準備活動期間 50分×10コマ
プログラムのカテゴリ、形式※4	2(講習会・学習会・ワークショップ)、3(講演会・シンポジウム)、 4(総合的な学習の時間)、13(体験学習)、16(避難・防災訓練)
活動目的※5	3(災害に強い地域をつくる)
達成目標	<p>1、中学生が主導する住民参加型の地域防災訓練を毎年行い、地域防災の力と意識を年々高めるとともに、中学生が防災・減災の知識とスキル、そして自助と共助の術を習得する。 このことにより、現在及び将来の地域防災を担う人材が育成され、毎年卒業生が地域に増員されることにより、確実に地域防災力を向上させ、安全・安心な地域づくりに資する。</p> <p>2、学校・中学生が地域を巻き込む防災教育を実践展開し、中学生と住民が共に防災・減災に関する知識・スキル・態度を培う。そして、学校と地域の共通目標である地域防災力の向上と安全・安心な地域づくりを目指し、共通目標の達成度を高めるため、両者による連合体を組織して連携・協働を推進する。</p> <p>3、本プランの実践とその成果は、生徒や教員が積極的に外部発信し、第三者評価を受けてプランの改善と創出を図る。また、被災地の復興支援の輪を広めたり、防災教育の取組校を拡充したり、など、本プランの成果や効果と防災教育実践の必要性和重要性の周知拡大を図る。</p> <p>4、防災教育を通じて学校と地域が協働し、両者の絆を強め、希薄な人間関係等の地域が抱える課題の解決を図り、持続可能な地域コミュニティ形成に波及・寄与する。</p> <p>5、本プランによる防災教育を通じて、生徒は“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ心と姿勢を変容させ、自助と共助の心を培い、他者と心を通い合わせることができる豊かな人間性を育む。</p>



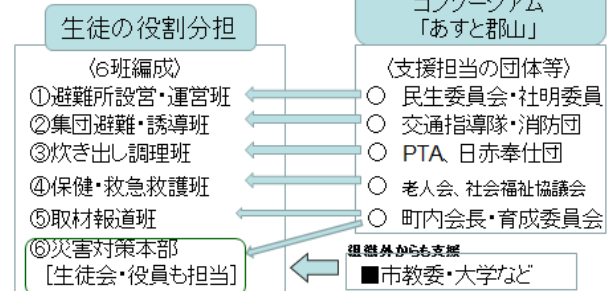
(1) 地域防災訓練の概要

本実践は平成27年度から郡山中学校区の小学校と中学校、町内会、消防団・消防署、PTA等が協働して地域合同防災訓練を以下の概要で行っている。

中学生が主導する地域防災訓練

中学生は次項の実施概要に示すように、各班活動を主導して訓練を行い、町内会や消防団等の地域組織の援助を受け、地域を巻き込む取組展開を図っている。

活動班と援助組織



生徒の班活動を、組織が分担支援

○実施日時 平成27年11月21日(土)
平成28年11月19日(土)
平成29年11月18日(土)

毎年ともに 8:15~16:30で実施している。

○実施形態 授業日として全校生徒が参加、地域住民が自主参加
本訓練では、3年生全員と2年生の一部生徒が上図に示している6班を分担して実施する。各班には、コンソーシアム「あすと郡山」

実践方法・進め方 (箇条書き またはフロー)

時刻	所属 内容	郡中3年+2年一部	1年生全員と2年生の大部分の生徒・地域住民・保護者 東長町小・出身 八本松小・出身 郡山小・出身
8:15	避難場所・学校に集合	郡山中学校に登校(クラスごとに出席確認後、班活動を開始)	〈各地の一時避難所に集合〉→〈各集団避難所へ移動〉 東長町小学校 八本松公園 郡山中学校
9:00	支援活動の内容 9:00~ 受付開始	A避難所の開設と運営 B炊き出し調理 C取材報道活動:撮影等 D救急救護の活動支援 E会場内の誘導・案内 F災害対策本部の支援 G集団避難誘導 など	○郡山連合町内会の避難訓練に参加 ○町内会の行事終了後、中学校へ集団避難移動(担当生徒が集団避難誘導) ○担当生徒が集団避難誘導 ○交通安全協会の支援を受け移動 ○一時避難所から郡山中に集団避難・点呼 ○郡山中で避難終了式(~9:30) ○児童は郡山小へ集団移動訓練
9:30	備蓄物資の見学	集団避難完了後、中学校に備えられている備蓄物資展示の見学	
10:45	防災・減災のコース学習	【開始時刻 ①9:30、②10:45】コースAとBは、抱き合わせて見学 コースA:消防署による消防車・はしご車等の装備見学と実演・体験 コースB:担当生徒による備蓄物資の展示・説明、消防署による煙霧体験 コースC:気象台による講演 ①気象予報官「大雨による宮城県の災害」 ②地球温暖化情報官「東北地方における気象の変化」	
12:00	炊き出し調理 試食	○炊き出し調理班が調理し、配給班が炊き出しを配給・片付け ○生徒と教員・P、整理券を持つ保護者と住民等900人に配給	
13:00	〈市・危機管理室〉	試食時に〈本校学区における河川氾濫に対する新たな避難情報等の行政説明〉	
13:15	防災教育 シンポジウム	1、開 会:生徒会・新会長 2、挨拶と講師紹介:校長 3、講 演:演題「釜石の小中学校が創った防災教育〜大震災前とその後〜」 講師 岩手大学大学院教育学研究科 准教授 森本 晋也 氏 釜石東中学校・震災当時の生徒会長 沼崎 健くん	
14:45	※司会・進行 等の運営は生徒会	〈休憩15分〉	
15:00		4、班活動と取材報道班の報告:班ごとの活動成果、取材報告 5、講 評:仙台市教育委員会 6、閉会の挨拶:生徒会・旧会長	
16:00	後片付け・下校	全校生徒で協力して片付け・全校生徒の完全下校 16:30	



の地域組織が援助しており、このことにより地域を巻き込む形で中学生が主導する地域防災訓練を展開している。

訓練の避難者役は、1年生全員と2年生の上記6班に所属しない生徒、そして希望して参加する地域住民と保護者である。さらに、訓練の視察者として市や区役所等の行政、市教委、大学生、防災教育に関わっている他県の教育関係者など、毎年多彩な方々が本実践を視察している。

○実施概要

前項の表に示す実施概要は、平成29年度に行った内容である。各小中学校・公園の避難所には各地区所属の小中学生や住民、保護者が避難者として参加した。

(2) 生徒が主導する訓練概要【各班活動の様子】

平成27～29年度に、生徒が主導して取り組んだ地域防災訓練において、各班の活動の様子を以下に示す。

A 避難所の開設と運営



B 炊き出し調理と配給（カレーと豚汁を調理して配給）

B-1、炊き出し調理班



B-2、炊き出し配給班



炊き出し班の生徒達は、平成28年度は800食数、今年度には900食数を調理し、全校生徒や地域住民に配給している。

住民の皆さんからは、炊き出しの美味しさが、年々増しているとの評価をいただいて、調理班の生徒達もやりがいを感じていた。



C 救急救護の活動支援

救護ブースの設営と血圧測定や心肺蘇生訓練の実演を披露



さらに、避難所内を周り、避難者の健康観察チェックを実施



D 取材活動・・・訓練の様子を撮影し、各班や避難者、消防署等の訓練支援者に取材して、午後に開催するシンポジウムで取材報告を、号外新聞を配布すると共にプレゼン発表している。



取材後 郡中ワイフライン 2017年11月18日(土曜日)

防災でつながる命

地域力が試される防災訓練！！

郡中 Lifeline

郡中防災フォトコレクション ～今日の功績～

取材後 郡中ワイフライン 2017年11月18日(土曜日)

郡中に広がるぬくもり

助けを要する

号外新聞の裏面

号外新聞：訓練日に発行

郡中防災フォトコレクション ～今日の功績～

取材後 郡中ワイフライン 2017年11月18日(土曜日)

助けを要する

号外新聞の裏面



- E** 災害対策本部の支援活動・・・本部には生徒会役員、町内会長、区役所、育成委員、青少年指導委員などが参集し、生徒会からの報告を受けて進捗状況を把握・助言



- F** 備蓄物資・食材の展示と説明・・・仮設トイレを組立展示し、防災倉庫から備蓄物資や備品、食材等を運び出して展示。避難者住民や下級生に種類・数量等を説明



- G** 集団避難と誘導・・・一時避難所からの集団避難の誘導と、本校敷地内にて避難所への誘導案内を実施





(3) コース別学習の概要

平成27年度から地域防災訓練時に行っているコース別学習は、生徒と訓練に参加する住民が一緒になって防災・減災について学ぶ取組である。この学習では、毎年様々な団体・機関等に協力支援をいただいております。その主なコース別学習は次の通りである。

コース	平成27年度	平成28年度	平成29年度
A	地元消防団による消防実演と講話、装備等の説明	消防署による梯子車の救助演習と煙霧体験、ラップを使った応急処置の演習、そして特殊車両とその装備を展示	
B	生徒会が津波被災地視察と防災学習成果の報告	国交省による治水対策と水防設備に関する講演	仙台管区気象台が気象と水害に関する2つ講演
C	備蓄物資の展示・説明をする担当生徒が、仮設トイレやプライベートルールの組立展示、備蓄倉庫内の物資・食料等を展示してその説明		

① コースA

平成27年度の消防団：仕事内容や装備などの説明と消防服の試着
消防団員の中には、地元在住の本校卒業生がおり、熱心に説明してくれた。



平成28・29年度の消防署：

【特殊車両とその装備の展示説明】



【梯子車による救助実演】



【ラップを用いた応急処置訓練】 【煙の中を進む濃煙体験】

校舎4階から救出体験

② コースB

平成27年度：
生徒会が津波被災地視察と防災学習成果を報告





平成 2 8 年度：国交省による治水対策と水防設備に関する講演



平成 2 9 年度：仙台湾気象台が気象と水害に関する講演

①気象予報官：大雨による宮城県の大災害 ②情報官：東北地方における気象の変化



③ コース C

平成 2 7 年度から毎年、備蓄物資の展示・説明をする担当生徒が、仮設トイレやプライベートルームの組立展示、備蓄倉庫内の物資・食料等を展示してその説明



(4) その他、協力支援・準備訓練などの様子

① みやぎ生協が食材物資を搬入

【災害時における“みやぎ生協”と“学校”の連携訓練】



②公益財団法人

ＪＫＡ『新世紀未来
創造プロジェクト』
に採択され、
炊き出し用の調理器
材を購入・整備





- ③ガス燃料は地元燃料店から提供 ④本校の保護者が炊き出し
(豚汁)調理を支援



以上のように、中学生が主導する地域防災訓練では、保護者や地域の企業などと連携を図り、人的・物的教育資源の支援のもと、年々、教育実践を拡充・充実している。そして中学生が主役で訓練を主導することにより、地域貢献活動に尽力している。このような取組では、中学生が地域住民との関わりと繋がりが醸成されるとともに、中学生は“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へと心と姿勢を変容させている。

(5) 生徒会が司会・運営する防災教育シンポジウム

【平成29年度】

- ① 講師として、岩手大学大学院教育学研究科・准教授の森本晋也氏と、釜石東中学校・震災当時の生徒会長 沼崎 健くんのお二人のコラボレーション講演、そして生徒との質疑
演題「釜石の小中学校が創った防災教育～大震災前とその後～」
【司会進行は生徒会役員】



- ② 取材報道班が当日の各班の活動紹介と取材報告をプレゼン



避難者役の1・2年生や住民、主に3年生が担当した各班活動、そして消防署などの協力していただいた方々に取材した結果を報告している。さらには、昨年度から号外新聞(P31 に記載)を発行し、取材報道班が午前中に取材した結果をまとめ、午後のシンポジウムに印刷・配布しているものである。号外新聞は、昨年度から地域防災訓練の当日の午後に発行しており、今年度の新聞は手書きからワープロで編集され、さらなる取材班の活動内容の拡充が図られている。

③ 仙台市教育委員会の講評と生徒会の閉会挨拶

仙台市教育委員会の防災教育担当者の講評では、中学生が主体的に地域の防災を担おうとしている姿と行動に、賞賛する言葉をいただいた。また、地域との協働する教育活動が展開されており、学校が核とする地域創生と開かれた学校づくりが図られている、素晴らしい実践であるとの講評をいただいた。

生徒会長の閉会の挨拶では、これからの防災学習に対する意欲を述べると共に、地域の防災・減災に中学生の訓練の成果を活かし、今後発生する自然災害に向けた備えの大切さ、そして中学生の地域防災力の向上に向けた決意を表明した。



(6) アンケート調査の記述の抜粋結果と分析

アンケート用紙の記述欄には、生徒や住民が以下のような感想等を記入している。【平成29年度】

〈1年生〉

- 小学校の時も防災訓練はあったが、その時は大人が中心となって活動を進めていたが、郡山中の防災訓練は中学生が中心となって活動するので、小学校の時より、学べるが多かった。
- 1年生で避難者役をしてみても、先輩方の姿に感動しました。また、来年、私達もこうなれるよう協力して頑張りたいと思いました。今回は避難者役として安全に行動し、学べたので良かったと思います。
- 地域の人や友達と協力することで、一人では出来ないことを行うことも出来ました。今回の防災訓練は、防災の知識だけでなく、助け合うことの大切さを学ぶことが出来ました。
- 中学生が「支える側」として主体となって取り組むことで、地域だけで行う防災訓練よりも参加者が増え、活性化するので良いと思った。「支えられる人」から「支える人」として変わることの出来る良い機会だと感じた。

〈2年生〉

- 中学生が中心となり行う防災訓練は、これからも必要だと思う。大きな災害は忘れた頃にやってくる。このような訓練を次の世代へと、どんどん受け継いでほしいなと思いました。
- 防災訓練で僕が最も心に残ったことは、岩手大学の先生と大学生の講話です。大学生が中学生当時、防災に取り組みビデオまで作ってしまうことに、とても感心しました。そして、それが2011年の震災時に役立ったと聞き、今、私達のしている防災訓練の意味を改めて学ぶことが出来ました。来年もやるなら、もっと地域をリードしていけるようにしたいです。



○取材班になってみて、昨年度よりも様々なことを感じられた一日でした。避難民の方々に何ができるかを考え、裏でどんなことをやっているのか知ることができました。最初は取材班をすることは、ただ大変なだけだと思っていましたが、やっているうちに、これも必要なことなんだと感じました。来年は三つの小学校と協力し、地域の人ともっと協力できれば良いと思います。また、出来るのであれば、取材班をやって、防災の大切さを伝えることが出来たら良いと思いました。

○釜石市で行われていた防災訓練は、私達、海に近くない地域の防災訓練とは違っていて驚いた。想定という言葉にとらわれずに、自分でしっかり判断して、自分の身を守ることが大切だと分かった。もし、大きな地震が発生したら、私たち中学生が中心となって、高齢者や小さな子達の地域の方々を、率先して避難させたいと思った。

○中学3年間の中で、避難者役と運営する役をどちらも体験できるのは、とても良い機会だし、役に立つと思うので、これからも続けていった方が良いと思う。

〈3年生〉

○万一大きな災害が起きた場合はもちろん、一人では何もできないので、今回のような防災訓練を行い、地域の方々とコミュニケーションを取りやすくすることは大切だと思った。また、地域全体を見たときには、年齢の幅が広いので、一番動ける僕たち中学生ぐらいの人が、率先して取り組むべきだと改めて感じた。

○私は取材班として活動し、様々な体験、班の見学を行いました。私達が取材したことにより、その班や消防署の方の仕事は勿論、どんな気持ちを持って活動しているのかを知れる良い機会でした。また、実際大きな地震が起きたとしても、学校が一つになり、動くことができるので、このような防災訓練は大切だし、なくてはならないと思いました。

○今回、取材班としてこの地域防災訓練に参加したことで、取材を通して地域の人とつながることができ、一体化を感じられた。さらに、新聞を作って発行したことで、正しい情報をより早く伝えることの大切さを学ぶことができた。実際に災害が起こったときには、この経験を活かして、自分の出来ることをやっていきたい。

○今回私はプライベートルームの説明を主に行ったのですが、1年生や2年生、地域の方々に見に来てもらったとき、皆さんが興味を持って説明を真剣に聞いてくれたり、質問をしてくれたりして、とてもやりがいを感じられました。互いに意見を交わし合って、それを災害時に活用させることは、とても重要だと思いました。

○防災訓練を通じて、中学生、友達、クラスメイト、学年の関わりが深まったので、防災への意識だけでなく別のものも良くなったと思う。

○今回も運営役として参加したが、昨年と比べて防災訓練に取り組む気持ちに変化があったと感じた。この気持ちの変化は、学年が上がったこともあるが、何よりも、もしもの時に、自分やその周



囲の人の命を守りたい、震災を風化させないという強い気持ちが芽生えたからだと思う。今回は地域の方々から沢山の励ましの言葉をいただいて、今後も中学校と地域が一丸となって、何かに取り組んでいくことは、継続すべきだと改めて感じた。

- 大量のカレーや豚汁を全校生徒に配ったり、絶対一人では出来ないことでも、みんなと協力することでやり遂げることが出来た。このような体験は毎年やることで、次の世代へとつなげることが出来るので大切だと思った。

〈地域住民〉

- 中学生が中心となって地域の防災訓練を行うことで、大人も「やらなければならない」という思いになると共に、地域の活性化に繋がると思います。生徒の皆さんも防災に対して、それぞれ自分で考えて行動するなど、人としても大きく育っている印象を受けました。本日は参加させていただき、誠にありがとうございました。
- 学校挙げて真剣に取り組まれている姿勢見受けられ好ましく思われました。先生方のご指導の下、生徒達も素直に機敏に行動され、頼もしく思いました。
- 中学3年生までになると聞かれたら自分の役割を説明できるほど、自分の行動を理解していたことに驚いた。話しかけられても物怖じせず対応してくれたことが嬉しかった。地域の方も明るく対応して下さり、もし郡山の近くで地震に遭い、郡山中に避難してきても大丈夫そうだという安心感を感じました。中3のある女子は「高校に行っても手伝いに来たい」と言っていた。郡山の地域で中学を卒業しても皆が集まるような大きく人気あるイベントに、この防災訓練がなっていけば良いと思う。
- 訓練していれば、災害時の動き、困っている人の手助けが出来ると思う。今後も続けてほしいと思います。お疲れ様でした。
- 地域を巻き込んだ防災訓練の実施を広めていく必要を、改めて実感しました。中学生が中心となって活動する姿を見て、考えさせられました。
- 中学生が自主的に活動する姿に頼もしさを感じました。素晴らしい活動なので、今後も活発に行ってほしいと思います。

以上の記述から、生徒や住民が“中学生が主導する地域防災訓練”の必要性和重要性を認識し、さらには学校と地域が世代を超えた交流と一体化が図れる貴重な機会と体験であったことが分かる。そして本訓練は地域防災力の向上に資する訓練だけでなく、地域コミュニティ形成に繋がるものと考ええる。

(7) アンケート調査の結果と分析

中学生が主導する地域防災訓練が終了後、中学生と地域住民を対象に、中学生に17、住民に10の質問項目からなる4件尺度法（選択肢：大いに、まあまあ、あまり、ぜんぜん）によるアンケート調査を行った。以下の表には、平成27～29年度の選択肢“大いに”割合のみを示している。



なお数値の色は、平成 26 年度入学生が青色、平成 27 年度入学生が赤色、平成 28 年度入学生が緑色で表示し、また同じ入学年度の学年が、前年度より割合が高まった場合に、“大いに” 割合の数値を○で囲んでいる。

NO	質 問 内 容	選 択 肢	調査 年度	調 査 対 象 者			
				1 年	2 年	3 年	住民
1	地域だけで行う防災訓練とくらべて、学校と地域が一緒になって防災訓練を行うことは必要である。	大いに	H27	72.5	77.5	80.4	86.4
			H28	83.3	78.3	90.9	68.0
			H29	74.9	76.8	78.2	80.5
2	中学生が中心になって地域防災訓練を実施することにより、中学生は地域防災に貢献できると思う。	大いに	H27	62.1	78.2	78.6	81.8
			H28	81.0	75.3	92.0	65.4
			H29	71.3	75.0	75.9	87.5
3	本日の地域防災訓練で活動・体験して、良かった・ためになったと感じる。	大いに	H27	65.0	67.9	72.9	66.7
			H28	78.1	56.4	82.2	52.2
			H29	68.4	59.7	62.0	65.9
4	実際に大きな地震が起きた場合、地域防災訓練は役立つと思う。	大いに	H27	76.8	72.5	79.2	74.4
			H28	85.4	75.6	88.5	69.2
			H29	77.0	73.7	72.9	77.5
5	中学生が中心になって行う地域防災訓練は、毎年、実施する必要があると考える。	大いに	H27	44.3	38.7	55.3	62.8
			H28	59.2	64.5	74.1	65.4
			H29	53.9	55.4	60.4	85.4
6	中学生や学校が、地域防災訓練を行ったり、協力したりすることは必要と感じる。	大いに	H27	76.8	77.4	77.9	77.3
			H28	85.5	71.8	90.2	84.0
			H29	74.4	72.6	79.4	92.5
7	地域や学校と一緒に、様々な活動や取組を実施することは、地域の活性化につながると感じる。	大いに	H27	61.6	64.9	67.8	81.8
			H28	64.8	52.6	83.3	72.0
			H29	53.7	50.6	62.9	87.8
8	本日のような行事は、地域の皆さんと中学生の関わりが深まると感じる。	大いに	H27	53.4	58.2	64.8	67.4
			H28	62.6	47.4	75.3	68.0
			H29	48.6	45.1	48.8	78.0
9	地域防災訓練などの防災教育は、大切だと感じる。	大いに	H27	72.0	78.4	83.9	90.9
			H28	84.8	69.7	89.1	87.5
			H29	79.5	75.9	80.4	90.0
10	備蓄物資見学や消防署・消防団の講話、防災学習のプレゼン発表では、学ぶことや知ることができた。	大いに	H27	66.9	62.5	60.3	57.7
			H28	74.7	57.0	76.5	57.9
			H29	63.7	57.0	49.1	66.7

NO	質 問 内 容	選 択 肢	調査 年度	調 査 対 象 者			
				1 年	2 年	3 年	住民
11	自分の力が人のために役になって、うれしいと思う。	大いに	H27	58.2	56.5	69.3	
			H28	65.4	54.2	79.3	
			H29	57.9	54.2	57.1	
12	これからも、人のために役に立ちたいと思う。	大いに	H27	68.4	69.0	76.3	
			H28	74.3	62.8	86.8	
			H29	72.2	63.1	63.5	
13	人が人を助けることは、大切なことだと感じた。	大いに	H27	79.7	83.3	84.3	
			H28	92.1	78.2	93.1	
			H29	89.8	82.0	76.8	
14	自分は人を助けたり、人と支え合ったりしていきたいと思う。	大いに	H27	72.3	79.6	79.9	
			H28	88.3	68.4	88.5	
			H29	78.5	75.0	70.6	
15	自分にできることを探し続け、チャレンジしたいと思う。	大いに	H27	57.4	63.7	65.3	
			H28	68.7	49.7	77.0	
			H29	63.5	63.7	62.4	
16	どんな苦難にも立ち向かい、苦難を乗り越える努力をしていきたい。	大いに	H27	59.3	60.7	68.8	
			H28	67.0	55.8	81.0	
			H29	65.7	65.5	62.4	
17	自分の夢や希望を持ち続け、頑張りたいと思う。	大いに	H27	71.0	76.8	79.9	
			H28	81.6	65.4	82.2	
			H29	75.8	71.4	76.5	

以下に、3年間のデータを分析した結果をまとめてみる。

- ① 3ヶ年ともに、全ての項目において、選択肢“大いに”と“まあまあ”を加えた割合は8割を超え、全調査対象者が本訓練の成

果や効果を高く評価していることが分かる。

- ② 表中の赤色の矢印で示したように、平成26年度入学生と平成27年度入学生がともに2年生と3年生を比較すると、多くの調査項目で3年生になると割合が高まっている。このことは、中学生が主導する地域防災訓練で、2年生で避難者役を経験し、3年生で避難所開設・運営などの6班に別れて訓練を担う実行役になれるためと考えられる。一方で、平成27・28年度の入学生は、1年生と2年生のデータを比べると、ほとんどの項目において2年生で、割合が低下している。これらのことから、訓練の実行役として活躍や貢献したいとの意識が逆に高まっているものと想定できる。
- ③ NO5「中学生が中心になって行う地域防災訓練は、毎年、実施する必要があると考える。」では平成26・27年度の入学生と住民が、年々割合が高まっており、中学生主導の訓練の必要性が中学生だけでなく、住民も高まっていることが分かる。
- ④ 平成28年度の3年生と住民の両者は、選択肢“大いに”の割合が全ての項目で前年度を上回っている。また、平成29年度の3年生でも、多くの項目で前年度より割合が高くなっている。これらのことから、3年生は訓練の実行役として学び、その充実感と達成感を抱いたものと考えられる。住民においても、実行役の3年生の活動内容の高まりとその活躍ぶりが、年々高まりを見せていることから、住民の方々も高い評価を示したのと考えられる。
- ⑤ 住民対象の10項目の調査において、選択肢“大いに”が前年度より全ての項目で上回った。特に、NO6「中学生や学校が、地域防災訓練を行ったり、協力したりすることは必要と感じる。」84.0から92.5%、NO9「地域防災訓練などの防災教育は、大切だと感じる。」87.5から90.0%、NO7「地域や学校と一緒に、様々な活動や取組を実施することは、地域の活性化につながると感じる。」72.0から87.8%と15%向上している。これらのことから、地域防災訓練を通じて学校と地域が協働することで、防災教育の重要性を高く認識され、本教育実践が中学生の地域貢献と地域の活性化につながり、住民との関わりを深める効果と成果を得られることが確かめられる。
- ⑥ さらに、本教育実践が生徒の心的影響とその効果を問う項目NO11～NO17についてみると、いずれの項目においても選択肢「大いに」と「まあまあ」を加えると、ほぼ全ての項目で9割を超えている。このことは、本教育実践が生徒にNO11「自分の力が人のために役になって嬉しい」、NO12「これからも人のために役に立ちたい」、NO13「人が人を助けることは大切」、NO14「自分は人を助け、支え合いたい」、NO15「自分にできることを探し続け、チャレンジしたい」、NO16「どんな苦難にも立ち向かい、苦難を乗り越える努力をしたい」、NO17「自分の夢や希望を持ち続け、頑張りたい」いずれにおいても良好な心的影響をもたらす成果と効果があり、道徳心と自己肯定感・効力感を高めることが確かめられる。



このように、本教育実践は学校と地域が協働して防災教育を行うことで、その必要性和重要性を確かめられるとともに、中学生に対する心理的効果や本実践の教育的成果に多大なる波及・寄与することができる。

次に、各項目間の相関分析を行い、相関値が 0.4～0.7 の“相関あり”と 0.7 以上の“強い相関あり”を検証してみる。以下に示した相関表では、0.7 以上の強い相関を黄色、0.6 以上で 0.7 未満をピンク、0.5 以上で 0.6 未満を水色、0.4 以上で 0.5 未満を薄緑で、色分けして表示している。

相関分析では、平成 27 年度入学生が 3 年間を通じて地域防災訓練に関わり、どのような変容が見られるかを中心に分析してみる。2 年時は、1 年時の相関表と比較して次のことが H28 年の相関表により確認できる。NO12「これからも、人のために役に立ちたいと思う。」は他の全項目と相関があり、特に NO13「人が人を助けることは、大切なことだと感じた。」や NO14「自分は人を助けたり、人と支え合ったりしていきたいと思う。」とは強い相関を示している。また、NO5「中学生が中心になって行う地域防災訓練は毎年、実施す

H27 地域防災訓練アンケート調査・相関分析【第1学年】

	NO1	NO2	NO3	NO4	NO5	NO6	NO7	NO8	NO9	NO10	NO11	NO12	NO13	NO14	NO15	NO16	NO17
NO1		0.49	0.48	0.3	0.58	0.55	0.49	0.46	0.522	0.41	0.47	0.41	0.43	0.44	0.41	0.44	0.4
NO2			0.38	0.28	0.38	0.48	0.61	0.52	0.422	0.36	0.52	0.51	0.53	0.49	0.47	0.49	0.43
NO3				0.42	0.5	0.65	0.45	0.5	0.495	0.37	0.44	0.49	0.49	0.52	0.45	0.49	0.5
NO4					0.32	0.39	0.34	0.36	0.35	0.29	0.27	0.36	0.32	0.32	0.25	0.23	0.18
NO5						0.56	0.44	0.51	0.497	0.36	0.4	0.39	0.32	0.34	0.37	0.4	0.34
NO6							0.61	0.51	0.557	0.39	0.49	0.53	0.51	0.47	0.46	0.51	0.5
NO7								0.56	0.503	0.37	0.53	0.56	0.53	0.41	0.48	0.5	0.47
NO8									0.503	0.5	0.55	0.54	0.46	0.52	0.49	0.51	0.47
NO9										0.57	0.43	0.5	0.49	0.52	0.4	0.43	0.43
NO10											0.41	0.39	0.43	0.45	0.35	0.32	0.4
NO11												0.74	0.55	0.54	0.54	0.6	0.58
NO12													0.71	0.69	0.55	0.64	0.64
NO13														0.65	0.53	0.54	0.69
NO14															0.52	0.57	0.67
NO15																0.87	0.54
NO16																	0.65
NO17																	

H28 地域防災訓練アンケート調査・相関分析【第2学年】

	NO1	NO2	NO3	NO4	NO5	NO6	NO7	NO8	NO9	NO10	NO11	NO12	NO13	NO14	NO15	NO16	NO17
NO1		0.57	0.54	0.48	0.55	0.45	0.37	0.31	0.45	0.42	0.41	0.49	0.40	0.30	0.30	0.28	0.28
NO2			0.51	0.56	0.54	0.64	0.43	0.38	0.52	0.38	0.47	0.50	0.50	0.47	0.48	0.36	0.30
NO3				0.53	0.58	0.60	0.45	0.38	0.51	0.38	0.47	0.44	0.44	0.41	0.41	0.42	0.28
NO4					0.53	0.48	0.44	0.43	0.56	0.38	0.54	0.54	0.46	0.51	0.38	0.33	0.33
NO5						0.61	0.50	0.28	0.37	0.38	0.52	0.51	0.48	0.44	0.52	0.44	0.31
NO6							0.46	0.28	0.38	0.37	0.50	0.51	0.53	0.56	0.49	0.47	0.45
NO7								0.54	0.47	0.31	0.38	0.46	0.44	0.39	0.44	0.38	0.36
NO8									0.37	0.31	0.32	0.49	0.45	0.39	0.34	0.40	0.39
NO9										0.34	0.54	0.56	0.56	0.49	0.51	0.45	0.39
NO10											0.39	0.40	0.37	0.38	0.37	0.27	0.32
NO11												0.69	0.54	0.65	0.59	0.51	0.47
NO12													0.72	0.72	0.65	0.60	0.62
NO13														0.73	0.59	0.51	0.52
NO14															0.54	0.61	0.63
NO15																0.88	0.58
NO16																	0.62
NO17																	

る必要があると考える。」と NO9「地域防災訓練などの防災教育は、大切だと感じる。」、NO13 と NO14 との間にも強い相関を示している。このように、2 年生は今後とも人のために役立ちたいと思う気持ちが、いろいろな機会や場面に波及・寄与していることが分かる。特に、人を助けることは重要であり、人と支え合うことに繋がるものと認識している。また、中学生主導の地域防災訓練を継続することが必要であり、防災教育では重要であると認知している。平成 27 年度入学生が 3 年時になると、地域防災訓練を主導して行う実行役となり、訓練後の調査から相関分析を行うと、次のような結果が見られる。NO7・8 が NO11 から NO17 の心理的効果の項目群と相関があることから、中学 3 年生が防災教育を通じて、学校と地域の協働による地域の活性化や住民との関わりの深化により、自ら人を思いやる豊かな人間性と生き抜く力と意欲を培うことに関わりを強めていること

H29 地域防災訓練アンケート調査・相関分析【第3学年】

	NO1	NO2	NO3	NO4	NO5	NO6	NO7	NO8	NO9	NO10	NO11	NO12	NO13	NO14	NO15	NO16	NO17
NO1		0.49	0.44	0.46	0.57	0.70	0.44	0.36	0.56	0.18	0.41	0.29	0.30	0.30	0.25	0.23	0.23
NO2			0.38	0.33	0.37	0.50	0.40	0.33	0.34	0.06	0.30	0.33	0.25	0.37	0.34	0.28	0.19
NO3				0.44	0.46	0.46	0.47	0.46	0.37	0.28	0.47	0.46	0.45	0.42	0.34	0.45	0.34
NO4					0.37	0.52	0.39	0.40	0.54	0.31	0.36	0.32	0.36	0.24	0.28	0.29	0.29
NO5						0.61	0.45	0.44	0.49	0.20	0.36	0.30	0.34	0.28	0.30	0.24	0.25
NO6							0.46	0.43	0.65	0.18	0.46	0.35	0.45	0.38	0.38	0.26	0.25
NO7								0.72	0.37	0.22	0.48	0.49	0.45	0.50	0.46	0.44	0.45
NO8									0.41	0.13	0.51	0.48	0.48	0.46	0.40	0.39	0.45
NO9										0.38	0.36	0.31	0.52	0.36	0.31	0.27	0.29
NO10											0.24	0.10	0.12	0.11	0.22	0.22	0.22
NO11												0.78	0.58	0.60	0.56	0.49	0.51
NO12													0.70	0.69	0.59	0.58	0.56
NO13														0.73	0.52	0.50	0.50
NO14															0.73	0.59	0.58
NO15																0.67	0.61
NO16																	0.64
NO17																	



が確かめられる。

住民においては、H27 年と比較して強い相関を示す項目間が減っているものの、H28 年度においては次のような相関分析の結果を示している。住民は NO4「実際に大きな地震が起きた場合、地域防災訓練は役立つと思う。」と NO7「地域や学校が一緒になって、様々な活動や取組を実施することは、地域の活性化につながると感じる。」との間で強い相関になっている。このことから、住民は本教育実践により地域と学校が協働する活動や取組により地域の活性化をもたらすと共に、災害や有事の際にはその成果を発揮するものと認識している。

H27 地域防災訓練アンケート調査・相関分析【地域住民】

	NO1	NO2	NO3	NO4	NO5	NO6	NO7	NO8	NO9	NO10	NO11	NO12	NO13	NO14	NO15	NO16
NO1		0.81	0.67	0.06	-0.12	0.46	0.57	0.67	0.56	0.335	0.62	0.38	0.42	0.43	0.501	
NO2			0.5	-0.12	0.12	0.46	0.42	0.5	0.56	0.335	0.45	0.31	0.42	0.31	0.373	
NO3				0.12	0.25	0.24	0.32	0.45	0.39	0.63	0.261	0.34	0.31	0.28	0.51	0.481
NO4					0.17	0.4	0.32	0.5	0.27	0.4	0.445	0.5	0.58	0.43	0.56	0.35
NO5						0.6	0.28	0.09	0.02	0.266	-0.06	0	0.17	-0.1	0.05	0.029
NO6							0.35	0.29	0.04	0.325	0.093	0.19	0.46	0.3	0.25	0.084
NO7								0.73	0.54	0.459	0.362	0.5	0.72	0.6	0.42	0.364
NO8									0.59	0.565	0.583	0.66	0.6	0.5	0.44	0.64
NO9										0.525	0.671	0.66	0.9	0.57	0.51	0.595
NO10											0.492	0.46	0.58	0.52	0.57	0.611
NO11												0.62	0.65	0.5	0.34	0.399
NO12													0.7	0.45	0.42	0.506
NO13														0.71	0.77	0.543
NO14															0.67	0.441
NO15																0.633
NO16																

H28 地域防災訓練アンケート調査・相関分析【地域住民】

	NO1	NO2	NO3	NO4	NO5	NO6	NO7	NO8	NO9	NO10	NO11	NO12	NO13	NO14	NO15	NO16
NO1		0.43	0.11	0.25	0.27	0.11	0.05	-0.13	-0.17	-0.18	0.34	-0.14	0.04	0.30	0.21	0.31
NO2			0.45	0.29	0.23	0.08	0.27	0.20	0.05	0.20	0.02	0.40	0.09	0.41	0.46	0.49
NO3				0.06	0.2	0.39	0.08	0.40	0.53	0.52	0.53	0.20	0.51	0.53	0.47	0.42
NO4					0.15	-0.2	0.33	0.31	0.05	0.03	0.26	0.40	0.31	0.53	0.17	0.15
NO5						0.21	0.02	-0.16	-0.06	0.09	0.26	0.38	0.28	0.36	0.09	-0.21
NO6							-0.2	0.21	0.21	0.17	0.59	0.01	0.05	0.33	0.29	0.19
NO7								0.46	0.19	0.22	0.20	0.43	0.35	0.55	0.27	0.25
NO8									0.46	0.24	0.51	0.18	0.26	0.46	0.47	0.27
NO9										0.59	0.36	0.34	0.43	0.46	0.43	0.50
NO10											0.15	0.38	0.50	0.43	0.14	0.56
NO11												0.03	0.40	0.66	0.27	0.20
NO12													0.52	0.10	0.13	0.03
NO13														0.22	0.14	0.24
NO14															0.31	0.60
NO15																0.38
NO16																

H29 地域防災訓練アンケート調査・相関分析【地域住民】

	NO1	NO2	NO3	NO4	NO5	NO6	NO7	NO8	NO9	NO10	NO11	NO12	NO13	NO14	NO15	NO16
NO1		0.83	0.49	0.62	0.64	0.74	0.59	0.82	0.77	0.54	0.43	0.73	0.62	0.74	0.72	0.85
NO2			0.49	0.62	0.64	0.75	0.68	0.82	0.77	0.61	0.29	0.73	0.63	0.66	0.72	0.85
NO3				0.49	0.5	0.69	0.15	0.50	0.58	0.41	0.16	0.43	0.37	0.50	0.36	0.41
NO4					0.59	0.61	0.38	0.63	0.63	0.58	0.20	0.66	0.70	0.74	0.65	0.71
NO5						0.81	0.32	0.72	0.55	0.48	0.20	0.62	0.54	0.59	0.49	0.58
NO6							0.4	0.80	0.70	0.60	0.27	0.63	0.61	0.73	0.59	0.67
NO7								0.49	0.68	0.36	0.69	0.42	0.46	0.49	0.50	0.65
NO8									0.84	0.73	0.24	0.83	0.69	0.78	0.63	0.88
NO9										0.67	0.52	0.76	0.72	0.78	0.56	0.83
NO10											0.12	0.71	0.68	0.82	0.45	0.67
NO11												0.20	0.34	0.32	0.23	0.33
NO12													0.81	0.78	0.62	0.79
NO13														0.85	0.52	0.70
NO14															0.72	0.80
NO15																0.72
NO16																

NO1・9が他の全ての項目と相関関係が認められ、さらにそれぞれ8項目と強い相関を示している。このことから、住民は学校と地域が一緒になって防災訓練を行う必要性和防災教育の重要性を強く認識できたことが分かる。そして、多くの

調査項目間で相関が見られることから、学校と地域が協働する取組に対して強い期待感を持っていることが確かめられた。

下の表は住民向けの調査 NO11～N016 の集計結果である。赤色の数値は、3年間の実践で最も高い割合を示した年度で、平成29年度が6項目中の5項目を占め、住民の方々は学校と地域が協働す

NO	質 問 内 容	調 査 対象	選 択 肢	調 査 年 度		
				H27	H28	H29
11	本日のような訓練に限らず、地域で行う防災訓練は必要である。	住民	大いに	86.4	92.0	78.0
			まあまあ	13.6	8.0	17.1
12	本日のような地域防災訓練が必要となる大きな地震が、今後、起こると思う。	住民	大いに	67.4	64.0	68.3
			まあまあ	30.2	24.0	29.3
13	本日の防災訓練のように、地域や学校が一緒になって取り組む活動が、増えることは良いことだと思う。	住民	大いに	79.1	76.0	87.5
			まあまあ	20.9	20.0	10.0
14	班活動の内容や成果・課題の発表については、有意義である。	住民	大いに	72.2	54.2	72.5
			まあまあ	25.0	45.8	22.5
15	炊き出し訓練は必要であると思う。	住民	大いに	59.5	52.0	82.1
			まあまあ	38.1	40.0	10.3
16	中学生が中心になって行う地域防災訓練は、他の地域・学校にも広める必要があると思う。	住民	大いに	67.4	64.0	85.4
			まあまあ	30.2	32.0	12.2



	<p>る活動が増えることや、中学生主導の地域防災訓練を他地域に広める必要性を望んでいる。さらに相関分析でも、NO16 他地域へ広める必要性を、多くの調査項目との関係性からも期待していることが分かる。</p>
準備、使用したもの ・ 人材 ・ 道具、材料等	<p>【人材】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 岩手大学准教授と大学生、宮城教育大学、仙台市教育委員会、仙台管区气象台、仙台市農業園芸センター、太白区消防署、仙台市行政(市役所・区役所)、交番所 ・ 町内会、民生委員児童委員、社会福祉協議会、日本赤十字、婦人防火クラブ、交通指導隊、消防団、老人会、PTA、本校学区健全育成協議会、親父の会 ・ 公益財団法人 J K A ・ 日本ユネスコ協会連盟・ちゅうでん教育振興財団、NPO 法人 日本持続発展教育 (ESD) 推進フォーラム、(株)荒浜アグリパートナーズ、みやぎ生協、地元燃料店とホームセンターなど <p>【道具、材料等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 炊き出し調理：ガスコンロ式、ガスボンベ、寸胴鍋、大鍋等 カレー・豚汁の食材、箸等の消耗品など ・ 本校備蓄物資：仮設トイレ、プライベートルーム、テレビ、毛布、備蓄食材 ・ 展示実演：消防署の梯子車・特殊装備車・救急車 心肺蘇生訓練人形、血圧計など
参加人数	<p>住民：148人と保護者：62人(+小学生や幼児 約30人)、 本校生徒：582人、学校支援組織：33人、 大学等の外部参加者・視察者(宮城教育大学13人、埼玉志木市7人、 他校4人)：24人、本校教職員：42人と他校教員約20人 総計 約940人</p>
経費の総額・内訳概要	<p>炊き出し食材費： 242,400円 消耗品費： 81,606円 ガスボンベ・ガス料金等：26,028円</p>
成果と課題	<p>東北地方にはこれまでM7クラスの宮城県沖地震が平均で約37年周期に発生していたものの、2011年3月11日の東日本大震災はM9の誰もが経験したことがない、想定外の未曾有の大惨事を発生させた。何度も宮城県沖地震を経験している仙台市立の学校では、全ての校舎の耐震化工事が完了し、避難訓練等の安全教育が続けられていた。しかし大震災後、全ての生徒が自らの命を自ら守り、生き抜く力の糧を学ぶためには、これまで行ってきた教育では限界を感じざるを得ない。そこで、大震災から得られた貴重な教訓を生かした新たな防災教育の創出を図り、その実践に挑み、試み続けることが必要かつ重要であると考えている。そこで本教育実践に取り組み、以下のように事項の図に示す成果や効果が得られている。</p> <p>【成果】</p> <p>①生徒が多様な体験的活動を通じて、防災・減災の知識とスキル、そして行動と防災対応能力を習得する。</p> <p>⇒ そこでさらに、習得する生徒が年々増加されることにより、地域の防災意識と防災力を確実に向上させ、安全・安心で強靱な地域づくりを担う人材育成に資することができる。</p> <p>②生徒は自主的で主体的に取り組む防災教育を実践することにより</p>

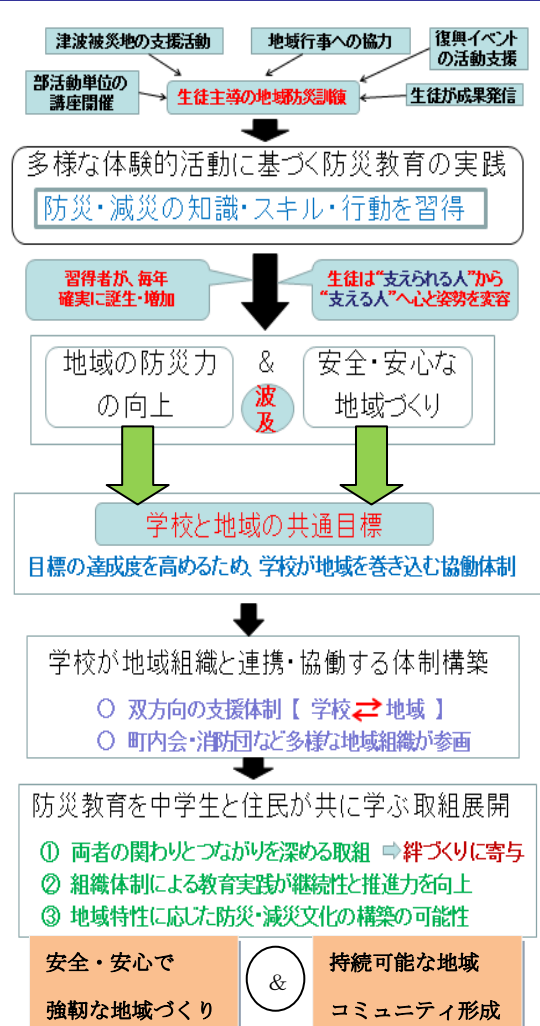


“支えられる人”から
“支える人、支え合う
人”へ、心と姿勢の
変容が図られる。

⇒ 生徒自らが実行
役として防災・減
災に取り組み、他
を支え、他と支え
合う共助や、他と
関わり合う豊かな
心と人間性を培う
ことができる。

③生徒は津波被災地の
支援活動を通じて、
大震災がもたらした
現実とその復興を知
り、被災者から教訓
を学ぶ。

⇒ 生徒が主体的に
復興支援に取り組
み、震災の教訓を
継承し、持続可能
な社会づくりを担
う人材を育むこと
ができる。



以上、本校の防災教育では保護者や地域を組織的に巻き込む仕組みを構築しつつ、学校・地域支援組織の設立・拡充を進めている。上記の図に示したように、中学生が主導する地域防災訓練をメインプランに、多様な体験的活動に基づく防災教育の実践を創出している。これらの実践により、生徒は防災や減災の知識・スキル・行動と防災対応能力を習得する。毎年、その習得者が卒業して地域に増員され、確実に住民の防災意識と地域防災力は高まりを見せている。また、実践を通じて生徒は“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ心と姿勢を変容し、他者と助け支え合う共助や、他と関わり合う豊かな人間性を育むことができる。そして、実践が継続することで、地域の様々な年代の人々と関わり、繋がり、延いては絆づくりに寄与し、心が通い合う安全・安心で強靱な地域づくりに波及し、持続可能な地域コミュニティの形成に資することが期待できる。

本実践プランはこれまで4つの中学校で実践されてきた実績があることから、汎用性、継続性、有効性、発展性において、防災教育の実践として評価できるものと考えられる。そして、本実践プランは現在から未来に向け、本実践による防災教育を継続することが、地域防災力が偉大なる力(共助という、地域の人と人が結びつく強靱



	<p>な絆を司るパワー)に進化するものと確信している。</p> <p>【課題】 本校学区は地域の再開発が進み、これまでの地域特性が失われつつあり、さらには住民間の関わりが薄れ続けるなど、新たな地域課題を抱えることになる。そのため、学校や地域の特性が変容する中で、今後実践を継続しながら、本実践プランの成果や効果をさらに分析と検証を重ね続けてプランの改善と改良を行っていく必要がある。</p>
成果物	<p>○地域防災訓練の実施企画・計画書やアンケート調査と分析結果</p> <p>○本校避難所運営マニュアルの改訂版(仙台市作成版に基づく改訂)</p> <p>○取材報道班が作成した号外新聞(訓練当日の午後に発行)</p> <p>○生徒会がプレゼン発表に使用した「生徒・住民向け防災学習成果プレゼン資料(パワーポイント)」</p> <p>○学校と地域組織との連携体制の構築推進計画書</p> <p>○補足資料 「学校と地域が協働し、多様な体験的活動に基づく、中学生が主導する防災教育の実践研究」</p>

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。



4. 苦勞した点・工夫した点

<p>プランの立案と調整で苦勞した点工夫した点</p>	<p>①現任校では大震災から7年が経過しようとしており、震災の記憶と教訓が忘却・風化が懸念されている現況から、校長が転任してきた平成27年度から津波被災地の視察や交流をプランニングしてきた。平成27年度には甚大な津波被害を受けた気仙沼市教委に打診をし、平成28年度に実施のプランを現地の中学校等と検討することになっていたものの、震災後から多くの交流・視察が予定されており、新た日本校が入り込む予知がないことを確認するに止まった。そこで、県内の他地域との交渉を行い、平成28年度に亘理町と若林区に支援をいただくこととなり、新規プランを互いの協議により策定することとなった。</p> <p>②平成28年度には1年生約200人と2年生約200人が、9月に津波被災地の仙台市若林区や亘理町・山元町を視察し、被災農家での奉仕活動や地元の中学校と交流を行っている。この実践プランでは、仙台市農業園芸センターや(株)荒浜アグリパートナーズ、亘理町の商工観光課や農林水産課、観光協会、荒浜地区まちづくり協議会、地元の語り部の皆様など、多くの組織や方々との調整やプランの検討、そして現地の事前見学などにより、プランを立案している。このため、プランを充実・拡充するための検討と協議に、時間と労力が費やされた。</p> <p>③中学生が主導する地域防災訓練は、平成27年度から実施しているものの、毎年、新たな方々の協力を得て実施内容の拡充を図っているため、プランの立案に様々な組織の方々とともに検討・協議し、多くの時間をかけてプランづくりを行っている。</p> <p>④仙台市教育委員会が作成している「防災教育副読本」を有効活用するため、各実践プラントとの関連づけを図り、改めて実施計画等のプランを立案している。</p>
<p>準備活動で苦勞した点工夫した点</p>	<p>⑤津波被災地の視察・交流の実践プランの実施においては、生徒が被災に行くためのバス借用料が生じるが、その予算として公益財団の教育助成を申請し、予算獲得のために採択される必要があったため、申請書作成に尽力した。</p> <p>⑥地域防災訓練の炊き出しでは、平成27年度は寸胴鍋やガスコンロなどの備品を他校から借用していたが、平成28年度からは公益財団法人JKAの新世紀未来創造プロジェクトに採択申請を行い、その結果、採択を受け、炊き出し用の備品等を購入し、平成28年度から本校に炊き出し用の備品を年々拡充して炊き出しを行うことができた。</p> <p>⑦地域防災訓練では、平成28年度に加えて新たに支援をいただく組織や企業等との検討会を設け、立案したプランに基づいて準備活動を計画的に行っていたものの、それぞれの都合や実情により計画から準備が遅れた。しかし、各組織や企業に尽力をいただき、実施日の一月前には準備が整った。</p> <p>⑧防災教育シンポジウムで行う講演内容を決定する際、本校学区が水害地帯であることから、平成27年度は異常気象と洪水被害をテーマに、平成28年度は本校学区近くに存在する長町・利府活断層があることから活断層による地震と災害をテーマに考えていた。平成29年度には、防災教育の先進地であり、大震災で防災教育の成果を上げた釜石東中学校の関係者に講演をお願いすることが出来た。毎年11月にシンポジウムを開催する予定であり、講師である大学の研究者の選定を各年度初めに終えていた。このような中、平成27年9月には関東から東北南部に台風による大水害、平成28年4月に熊本や10月に鳥取の活断層地震が発生した。このような状況下に即して、毎年シンポジウム参加者の増員を図るため、講師とその講演テーマを地域住民に周知を図り、講演の準備活動を行った。本校学区にて洪水被害や活断層の災害がおよぶ可能性があることから、多くの住民に講演に参加を呼びかけた。しかし、結果として講演に参加した住民は、200人までに達しない状況に止まった。マスコミ報道により、住民の関心は確実に高まっているものの、参加が増えない理由に、開催日が良くないのか、周知が徹底されていないのか、何が要因なのか、平成30年度の</p>



	開催に向けて要因追究と準備活動内容を検証・検討していく必要がある。
実践に 当たって 苦勞した点 工夫した点	<ul style="list-style-type: none"> ○津波被災農家に弟子入り体験では、農家が毎年、手作業で行っている綿花畑の除草作業を支援している。弟子入り体験当日に小雨が降り続いており、中止することを考えていたが、生徒たちが被災地の視察や農家の震災からの大変な思いや苦勞を聞き、除草作業を行うことにした。生徒たちは雨に濡れながらも、黙々と除草をしていたことに、引率教員や農家の方々が熱い思いを抱かされた。 ○地域防災訓練では想定外の事態や状況が生じたものの、各班活動を担当した生徒たちが対策本部の町内会長に報告・相談しつつも、臨機応変に判断し、実行に移したことにより、各班活動を滞りなく完了することができた。 ○昨年度には、炊き出し配給時に提供する食器のうち、20個入りのプラスチックスプーン袋内に黒い粉が混入していることが確認された。このため、スプーン購入店に連絡を入れたものの、変わりの在庫がないことから、急きょ、炊き出し配給班が洗浄してスプーンを配布し、難を切り抜けることができた。今年度はこの経験を生かし、納品時における物品のチェック体制を整えることが出来た。 ○昨年度の地域防災訓練のコース別学習において、国土交通省・東北事務所の講演が予定時間を過ぎても終えず、他のコースの開始時刻を遅らせたり、続く学習時間の短縮を図ったり、生徒会が進捗と進行状況を常に把握して、対応に苦慮しつつも混乱もなくスムーズに運営できた。このため、今年度にコース別学習の講師をお願いした仙台管区气象台と、事前の打合せ等を増やして確認と協議を重ねた。 ○平成28年度の住民向けアンケート調査結果から、住民の訓練内容に対する要求水準が高まったことで割合が低下したことから、この課題解決のために地域学校支援組織との協議を増やし、開催内容やその目的等の周知を図り、課題解決を進めた。

5. 他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・ 同窓会組織	○岩手大学 2 人、宮城教育大学 1 3 人、 ○仙台市教育委員会 ○仙台市立郡山中学校、東長町小学校、 八本松小学校、郡山小学校 ○埼玉県志木市市民活動団体「レッツラブ しき」 7 人	○中学生が主導する地 域防災訓練の指導助 言、防災教育シンポジ ウムの講師・視察 ○地域防災訓練に参加 ○地域防災訓練等の参 観・視察
保護者・ P T A の組織	本校 P T A	地域防災訓練や防災教 育の協力支援
地域組織	町内会長、民生委員児童委員、社明委員、 交通指導隊、消防団、日赤奉仕団、老人会、 婦人防火クラブ、社会福祉協議会、青少年 健全育成協議会、おやじの会(郡山中・学 校支援組織、コンソーシアム「あすと郡 山」)	「中学生が主導する地 域防災訓練」において、 生徒の活動班を分担支 援、地域一斉清掃など学 校と地域の連携事業の 推進
国・地方公共団体・ 公共施設	○仙台市農業園芸センター ○八本松市民センター、郡山児童館、 郡山コミュニティセンター ○仙台管区気象台 仙台市消防局太白消防署 ○仙台市、太白区	○1 年生による津波被 災農家弟子入り体験 と津波被災地視察・交 流活動 ○部活動単位の奉仕活 動、八本松・地域防災 訓練の支援 ○地域防災訓練のコー ス別学習の講師 ○避難所担当課
企業・ 産業関連の組合等	○(株)荒浜アグリパートナーズ ○みやぎ生協・太子堂店 地元燃料店 スマタ ホームセンター コーナン ○国際観光	○津波被災農家に弟子 入り体験を受入 ○中学生が主導する地 域防災訓練において、 食材や消耗品の提供 ○津波被災地の視察支 援
ボランティア団体・ N P O 法人・N G O 等	○NPO 法人 日本持続発展教育 (ESD) 推 進フォーラム	○本実践分の成果を 冊子に掲載・広報
職業、職能団体・ 学術組織、学会等	公益社団法人 ○日本ユネスコ協会連盟 公益財団法人 ○ちゅうでん教育振興財団 ○J K A 「新世紀未来創造プロジェクト」 ○日本教育公務員弘済会宮城支部	防災教育関係備品や消 耗品、津波被災地視察・ 支援等の経費予算補助



6. 成果と課題（実践したプラン全般について）

<p>成果として 得たこと</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1、メインプランである「中学生が主導する住民参加型の地域防災訓練」を毎年行い、地域防災力と防災意識を年々高め、防災・減災の知識やスキルと防災対応能力を育み、自助と共助の術を習得できる。 そして、将来の地域防災を担う人材が育成され、毎年卒業生として増員されることにより、確実に地域防災力を向上させ、安全・安心な地域づくりに資することができる。 2、学校・中学生が地域を巻き込む防災教育を実践展開し、学校と地域の共通目標である地域防災力の向上と安全・安心な地域づくりに波及・寄与できる。さらに、これらの共通目標の達成度を高めるため、両者による連合体を組織することにより、連携・協働を推進できる。 3、本プランの実践により、中学生は大震災がもたらした現実を知り、教訓を学び継承できる。そして、主体的に復興支援に取り組むことで、持続可能な社会づくりを担う人材を育むことができる。 4、防災教育を通じて学校と地域が協働し、教員・生徒と住民の関わりと繋がりを深め、両者の絆づくりを推進し、希薄な人間関係等の今日的な地域が抱える課題の解決を図る可能性が高められる。 5、本プランによる防災教育を通じて、生徒は“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ心と姿勢を変容させ、共助の心を通い合わせる豊かな人間性を育むことができる。 6、本プランの実践とその成果は、生徒や教員が積極的に外部発信し、防災教育に関する専門的有識者から第三者評価を受け、実践プランの確かな改善と進化を図り、防災教育の拡充・発展を推進できる。さらに、外部発信に努めることで、防災教育の重要性と必要性を伝えて実践校の拡充を図る。
<p>全体の反省・ 感想・課題</p>	<p>プランタイトル「郡山中学校が小学校や地域と協働する防災教育活動プラン」は、“2、プランの年間活動記録”やP3の“実践プログラム番号：NO. 0”で示したように、年間にわたる防災教育による実践プランである。（年間計画・P3の表 防災教育の実践概要(平成29年度)：実践プランのねらい ①震災と教訓を学ぶ→②復興を知る、支援する→③防災・減災減災の知識、スキル、行動を習得する→④学習成果を発信する→⑤実践を評価する）そこで、各実践プランでは、可能な限りアンケート調査を実施し、その成果や課題の抽出ために分析を行い、客観的な成果の把握に努めている。しかし、各実践プランの相乗効果については、今後分析を行う必要があると考えている。そこで、この相乗効果を高めるため、様々な防災教育の体験的活動を積み重ね、その総括としてメインプランである「中学生が主導する地域防災訓練」を実践し、生徒が習得しているであろう防災・減災に関する知識やスキル、行動・能力を実行に移すプラン構成・構造を創り上げている。すなわち、この構成・構造が有効で効果的な働きとなっているか否かを相乗効果から検証することがこれからの課題であると考えている。</p>
<p>今後の 継続予定</p>	<p>今後も、本プランタイトル「郡山中学校が小学校や地域と協働する防災教育活動プラン」の実践プランを可能な限り継続し、各プランの成果や課題、そして各プラン間の相乗効果を継承し、各プランの改善・進化を図りながら年間の防災教育の全体構成・構造の発展展開を検証していく。</p> <p>また、本プランのさらなる新規性、独自性、汎用性を追究し、そして実践プランの有効性と有用性を検証して継続性、発展性を常に高めていきたい。</p> <p>そして、これらの実践研究については生徒や教員が積極的に外部に発信する機会を創出し、防災教育の関係者やその有識者等に第三者評価を求め続け、本プランの進化・発展を求め続けたいと考えている。</p> <p>さらに、本プランを継承する人材の育成も推し進める方略についても考慮しつつ、本プランの実践を継続するつもりである。</p>



7. 自由記述欄 ※6

※6 自由記述欄は、防災教育の実践で得られた知見、防災教育の普及に関わる提案等を盛り込んでください。また、前頁までの記述に不足した事項、参考資料、写真等を自由にご記入ください。なお、3ページ以内厳守をお願いします。

本実践プランは以下の表に示すように、これまで4つの中学校を歴任した校長が取り組んできた実践である。いずれの学校においても、町内会や公民館、婦人会や消防団等の多彩な地域組織からなる学校支援組織を設立している。この組織により、多様な体験的活動に基づく防災教育の実践プラン(次項の表)を、4中学校とその地域の特性に応じて創出し、学校と地域が協働する教育を推進することができる。

学校名	地域特性の概要	生徒数	学校支援組織の名称・人数 (町内会、婦人会、消防団、J A等)	生徒主導の 地域防災訓練
A 中	中山間地域で、少子高齢化と過疎化、兼業農家が多い	約 50 人	丸東・改援隊 3 9 人 (隊長: PTA 会長、名誉隊長: 公民館長)	H21~H22 (H24. 廃校)
B 中	県南の中心地近郊で、跡継ぎ不足で農業が衰退	約 100 人	金未来隊 4 6 人 (隊長: 公民館長)	H22 から継 続実施
C 中	仙台近隣の丘陵地で、大規模宅地開発されて二十数年経過	約 320 人	チームMY・SP 4 8 人 (会長: 連合町内会長)	H25 から実 施
D 中	仙台的副都心で大規模再開発地域、住宅と商業施設が混在	約 600 人	コンソーシアムあすと郡山 3 2 人(会長: P T A会長)	H27 から実 施

A 中やB中の地域はかつて農業が主産業だったが、機械化が進んだことで、今日、中学生が我が家の農作業を手伝うこともなくなっている。また、コンビニはどんな田舎にも有り、地産地消などその土地独自の郷土料理や味が消え、中学生は全国共通の味付け食品を食している。そこで、A 中・B 中において中学生が“農家に弟子入り体験”を学校支援組織による協働のもとで取り組んだ。畑作と稲作の農業を昔ながらの手作業で行い、収穫物を漬物等に加工する体験を全校生徒で行っている。中学生は農業を理解し、働くことの大変さを肌で感じ、収穫する喜びと昔ながらの地元の味を知ることになる。無農薬で栽培し、収穫する米、大豆は味噌、梅は梅干、大根は沢庵など、災害時の学校備蓄食材も兼ねて食材加工を行う。中学生はコンビニ食には有り得ない地元食と昔から受け継がれている味に驚き、キャリア教育と食育を収穫の喜び、食べる楽しみを通じて体感しながら学んでいる。そして、町の指定避難所である中学校に、生徒達が栽培・加工した備蓄食材が、地域のために備えられる防災教育に繋がる。

東日本大震災後に校長が勤務したC 中やD 中では“津波被災農家に弟子入り体験”や“津波被災地を視察・交流活動”を行い、被災地とその復興を知り、大震災の教訓を学び、受け継ぐ活動に取り組んでいる。これらの取組体験から学び取る自助と共助については、津波被害を知らない中学生にとって、最も大切な命に関わる課題に挑む教育でもある。この課題は自然災害時に限らず、いじめ問題においても、自助“自分の命は自分で守る”と、共助“人を助け、支え、励まし合う”を、生き抜いた被災者から学び取る教えにより、課題解決に大きく繋がるものとも考えられる。つまり、実践している防災教育は、防災・減災の知識やスキルを学ぶだけでなく、いじめ問題に果敢に立ち向かう実践でもあり、中学生の心を育む教育にも成り得ている。

また、4 中学校では“中学生が主導する地域防災訓練”を本実践プランのメインプランとして実施している。この訓練は、地域で行う住民参加型の地域防災訓練を中学校と協働し、中学生が避難所開設・運営、炊き出し調理、集団避難誘導、救急救護、災害情報収集、災害対策本部などを担い、学校支援組織の援助のもとで行う訓練である。中学生は”校内・炊き出し調理コンテスト”や“農家に弟子入り体験”等の多様な体験的活動で習得してきた知識やスキルを活かし、この訓練の実行者として自主的に自立して実践する。全体指揮は災害対策本部の町内長の支援を受けて生徒会役員が行い、各班活動の進捗状況の把握と各活動間の連携等の調整と指示をする訓練である。この訓練から、中学生は普段ほとんど関わることがない避難者役の住民の方々と知り合うことができ、多くの住民は中学生の活動に感謝と賞賛を表し、世代を超え

(自由記述: 1/3)



た関わりや繋がりをも生じている。

	実践プランのねらい	実践プランの内容	実践の学校			
			A 中	B 中	C 中	D 中
1	震災を学ぶ	地震を学ぶ 教訓を学ぶ	東北大学地震・噴火予知研究観測センター長の講演 津波被災農家の方々の講演（講師：若林区荒浜の被災農家）	○	○	○
2	復興を知る・学ぶ	復興支援の活動を行う	津波被災した中学校の復旧支援活動 津波被災の農家に弟子入り体験学習 仙台復興シンボルイベントを支援する清掃奉仕活動	○	○	○
3	震災に備える	備蓄食材の栽培加工 地域特性リスクを学ぶ 防災スキルを習得する 避難所の設備を整える 備えを調べる	農家に 弟子入り体験学習 手作業で稲作（田植え、除草、稲刈り、脱穀） 梅干し造り（収穫、天日干し、シソ漬け） みそ造り（大豆種まき、除草、収穫、加工） 学区内ハザードマップの作成 行政等作成のハザードマップを活用する学習活動 校内・炊き出し調理コンテスト 訓練：炊き出し、避難所開設・運営、避難誘導等 移動式・かまどベンチを作成（普段はベンチ、有事に“かまど”で使用） 10テーマ別の学習と発表（リスクとハザードの調査と対応方法を調査）	○	○	○
4	訓練を行う	支援組織と訓練の検討（企画・内容・計画・実行） 中学生が地域防災訓練を行う	生徒が訓練の企画・内容・計画を策定し、学校支援組織と協議・検討（学校支援組織は、生徒による訓練実行に向けた助言と補佐を事前に決定） 中学生が主導して地域防災訓練を実施：中学生が訓練内容毎に6班に分かれ、組織が分担支援して実施	○	○	○
5	実践を広める	成果を発信 地元へ 外部へ	A 中：議会堂にて模擬議会を開催（教委職員や議員との防災関連議案を質疑）、生徒が地域シンポジウムを開催 【県内外に発信】：防災教育チャレンジプラン、ぼうさい甲子園、ユネスコスクール東北大会など	○	○	○
6	評価・改善する	PDCA マネジメント 自己評価 外部評価 学校関係者評価	生徒や住民等へのアンケート調査とデータ分析による検証 防災教育チャレンジプラン・ぼうさい甲子園等での防災・減災に関する専門家による第三者評価 大学教官、教育委員会、学校支援組織による助言等の指導	○	○	○

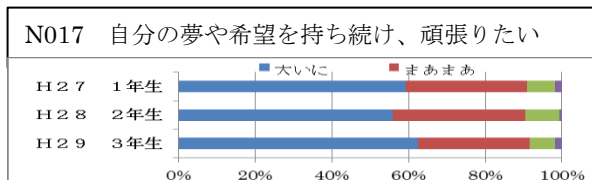
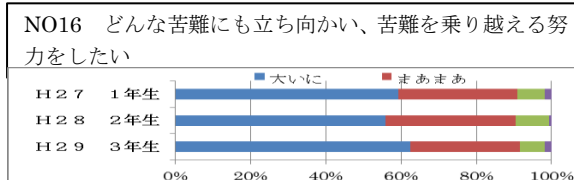
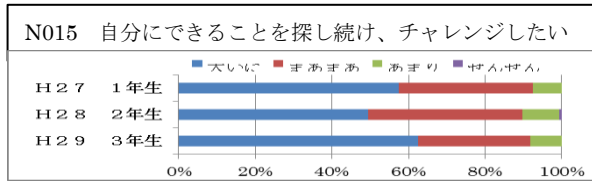
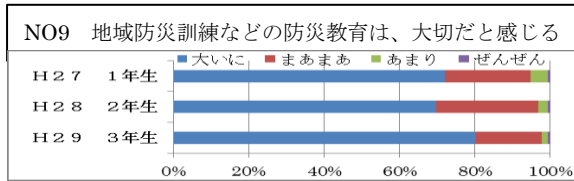
本実践モデルは、防災教育を通じて中学生に自助と共助を培い、今日的教育課題に対峙する心を育み、自己効力感・肯定感を高めることができる。そして、学校と地域の共通する目標である地域の防災力向上と安全・安心な地域づくりの担い手を育み、持続可能な地域コミュニティの形成に寄与・波及できる教育実践モデルである。4校とその地域の概要を示した表のように、規模や特性が異なる学校とその地域で、4校にわたり10年間この実践モデルを継続実践している。このように、このモデルには汎用性、発展性、有効性、独自性を有すると共に、多様な教育的成果や効果が込められている可能性を持ち得ていると考えられる。

そこで、現任校のD中では、防災教育といじめ抑止教育との融合を図り、教育実践にも取り組んでいる。D中では、防災教育の実践活動において、いじめ抑止対策のための教育を内包総括することを目指し、本実践を構想している。この防災教育といじめ抑止教育の融合教育では、防災教育の活動内容である自助、共助、公助をこの構想の礎的な視点として捉え、次項の表のように防災教育といじめ抑止教育の関連とその融合に挑んでいる。地域防災訓練のアンケート結果について、平成27年度の入学生が3ヶ年でどう変容をしたかを、以下の4つの項目から見てみる。いずれの項目についても2年時に値が若干1年時を下回るものの、3年時には1年時を上回る値となっている。このことから、防災教育の重要性を理解し、自らが探し挑む姿勢

（自由記述：2/3）



を培い、どんな苦難に立ち向かい乗り越える努力に意識を高め、自らの夢や希望を持ち続けて頑張る意欲を高めつつあることが分かる。



さらに、中学生が主導する住民参加型の地域防災訓練を、平成27年度から3ヶ年にわたり継続実践し、NO13「人が人を助けることは、大切なことだと感じた」とNO14「自分は人を助けたり、人と支え合ったりしていきたいと思う」の二つの調査項目では、選択肢“大いに”と“まあまあ”を加えた割合が、3年間とも1年生から3年生の全学年で95%を超えている。このことは、地域防災訓練などの防災教育が人と人の絆を育み、人の心を培う、心に響く教育でもあり、防災教育によって生徒は“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ、心と姿勢を変容させる成果と効果もあることが確かめられた。そして、防災教育は自助・共助・公助の捉え方の視点から、いじめ抑止教育に波及・寄与する可能性が高く、両者の融合教育を意図的・計画的に促進・推進することで、その両者において成果や効果を相乗的に高め合う可能性が期待できるものと考えられる。なぜなら、いじめは加害者、被害者、仲裁者、傍観者の4層構造からなり、いじめを止める、仲裁するなどの行動を取る仲裁者を欠くことによって進行していく。さらに、いじめの減少困難や助長の要因として、傍観者が挙げられており、傍観者層の多寡は被害者の多寡と最も強い有意な相関を示すことが検証されている。つまり、いじめ抑止には、傍観者層を減らせば被害者も減り、さらに仲裁者を増やせばよりいじめは防げることになる。防災教育の実践からは、“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ、心と姿勢が変容する成果と効果を、アンケート調査の分析結果が明らかにしている。このことは、傍観者を減らし、仲裁者を増やすことに繋がる可能性を高められるものの、その心と姿勢がいじめを止めたり、仲裁したり、などの行動へ繋がるとは限らない。そこで、本校のいじめ抑止教育では、ソーシャル・スキル・トレーニング(SST)を用い、いじめや暴力の抑制を図る。本教育実践では、いじめを許さない学級づくりを目的とした心理教育と、いじめの介入スキルを学ぶロールプレイン(SSTの技法を取り入れる)の2つで構成する、いじめ抑止のための心理教育的プログラムを開発している。特に、いじめ抑止教育の実践では、早稲田大学と共同研究により推進しており、平成28・29年度に研究授業を1・2年生の全クラスで行ってその成果や効果、課題等について大学と連携して分析を行っている。

以上のように融合教育では、防災教育で心と姿勢を育み、いじめ抑止教育でいじめの心理と介入スキルの行動を培い、相互の教育で心、姿勢、行動を相乗的に高める試みに挑んでいる。

	防 災 教 育	いじめ抑止教育	両者の関連と融合
自助	自分の命は、自分で守る 自他ともに、命はたった一つしかない大切なもの	命は掛け替えのない、唯一無二のものである。	被災者から命を守った術を学ぶ。 震災から生還した時の様子を聞き、生き延びた時の喜びと、命の大切さ、生きることの幸せを知る。
共助	一人では生き延びることが困難でも、仲間と助け合い、支え合い、どんな困難な状況下でも、生きる力と勇気が沸き上がる。 人は助け合い、支え合い、励まし合って生きている	いじめられている仲間を、助け合い、支え合い、励まし合う。 いじめをさせない、許さない、見逃さない。	震災時でも日常でも、人と人が助け合い、支え合い、励まし合うことは、人として当たり前の言動であることを学ぶ。 普段の生活から、仲間同士が関わり合い、繋がりが合い、互いを知り、気遣い合う存在であることを理解し、ともに一緒に生きている。
公助	自衛隊や消防、警察など、公と民間の組織・機関等が、被災者を助け、救い出す大きな力がある。 公の組織・機関などが人を助け、救い、支える	身近に話し相手がいなくても、苦しみ、悩み、悲しみを聞いてくれる相談機関や窓口があり、救われる。	震災と復興時、公や民間の組織と機関などが、多くの被災者の命と心を支え、助け、救っていることを知る。自分を助け、救い、励まし、支えてくれる、信頼できる人や組織があり、助けや救いを求めることができる。

(自由記述: 3/3)